

ウマ娘プリティードー
ビー 短編集

ピーナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

史実やアニメのシーンに絡めた短編を書いていきたいと思えます。

活動報告にて『あの日を超えて』シリーズのスズカの天皇賞・秋後のレースのご意見を募集中です。時間があれば見て下さい。

5月21日 連載から短編に変更しました。

5月22日 題名を変更しウマ娘に関連する短編集にしました。

目次

あの日を超えて	
プロローグ 11月1日	1
札幌記念 堕ちた逃亡者と捕らえられ なかつた者	6
天皇賞・秋 先輩の意地	13
ジャパンカップ 世界へ飛び立つため に	21
二人の3冠ウマ娘シリーズ	
2 冠ウマ娘と新人さん ついでに未完 の神器と絶対王者	26
3 冠ウマ娘が二人 それと世界のカツ ラギエース	32
3 冠ウマ娘が二人 さらにマイルの皇 帝さん	40
海外ウマ娘シリーズ	
ウマ娘昔話	44
幼馴染襲来！	50
消えたヒロイン	56
極北からの風	62
その他短編	
キンイロリョティは自分の旅程を振り 返る	67
もしもスピカに新メンバーが入るとし たら……	70
最強VS最強 〽歌劇王未だ覚醒せず	

奇石、奇跡の復活までの軌跡	—	82	74
お試し投稿	日曜日は騒がしく	87	
Tony's kitchen		92	
メジロくその血の運命	—	98	
神はいる。そう思った	—	103	

あの日を超えて

プロローグ 11月1日

秋の天皇賞を数日後に控えたある日。

「スズカ、今日から練習禁止な」

スピカの練習前の準備体操中にトレーナーがサイレンススズカに突然そう言い渡した。

「ど、どうしてですか？」

「いや、温泉まで走らせたのは、期間の開かれる他の奴等と違って秋に何走もするお前にやらせたのはミスだと思つてな。毎日王冠からの間も短かったわけだし、本番までゆっくり休め」

「……お前が悪いんじゃないか！」

と、ゴールドシップ、ウオッカ、ダイワスカーレット、トウカイテイオー、メジロマツクイーンの強烈な蹴りがトレーナーに入る。スペシャルウィークは苦笑いだ。

「……分かりました。でも、皆の練習の手伝いは良いですよね？」

「ああ。だけど、絶対走るなよ」

『1000メートルの走破タイムは……57秒4！ なんとというタイムでしょうか！』

天皇賞・秋。サイレンススズカが前半1000メートルで叩き出したタイムは玉碎覚悟の逃げ馬が出すような狂気のタイムだった。しかしそれでも心身ともに充実だった彼女にとっては余力を残してのタイムだ。

そして、第三コーナーに差し掛かった時、

（左足に違和感!? でも、走れないわけじゃない!）

違和感を感じた物のそのままレースを続行するスズカ。

『第4コーナーを回って、府中の526メートルの直線に入った！ 依然、先頭はサイレンススズカ！ 2番手にはエルコンドルパサーだが、未だ30メートルほどの差!』

（残しておいた差し足はギリギリまで使わない。ここからは我慢比べ!）

『残り400メートル！ 坂を上る！ 後続がどんどん迫ってきた！ サイレンススズカ、このまま逃げ切れるか！ それとも後続が飲み込むのか!』

3週間前は聞こえなかった足音が聞こえる。

（レース前に逃がさないと言ったあの子かしら? けど!）

『坂を登り切ったサイレンススズカ！ 二番手にエルコンドルパサー！ すぐ後ろにヒ

シアマゾン！ 差がどんどん……いや、縮まらない！ ラスト200メートルでサイレンススズカ再加速！ 後続をじりじりと引き離し……今、ゴール！ 二着にエルコンドルパサー、三着がヒシアマゾン！ そして、タイムが1分58秒丁度！ レコードタイムでの決着となりました！』

（やった……先頭のままゴール出来た）

気を抜いたからなのか、力の抜けた左足から倒れていくスズカ。しかし、

「スズカさん！」

真つ先に駆け込んできたスペシャルウィークが彼女を支える。

「足、大丈夫ですか？」

しかも、スズカの異変に気付いていたようだ。

「スペちゃん、どうして……」

「万全のスズカさんならもつと速いと思ってましたから！ あつ、おめでとうございませう！ スズカさん！」

「ありがとう、スペちゃん」

笑顔のスペシャルウィークと微笑むスズカに近付いていく、他のスピカのメンバー。

「スズカ、さっきのスペの話は本当か？」

「はい……少し痛みがあります。走れないほどでは無いですが……」

「そうか……。まずは、よく頑張った！　が、次走以降は白紙に戻す。まずは治す事だけを考えろ！」

「はい」

次走に予定していたジャパンカップもアメリカ留学も白紙になったがそれでもスズカの顔は明るかった。

「意外と落ち込んでいないな？」

「そうですね。留学できない悔しさもありますけど、スピカの皆と居れる嬉しさが大きいです。皆とならきつともつと速くなれると思いますから」

「スズカさん……」

スズカの言葉を聞いて、スペシャルウィークをはじめ、チームの皆の目には光るものがあった。

「よーしー！」

ゴールドシップがスズカを肩車する。

「スズカの足の代わりに私になって、ウイニングランだ！」

「俺も（私も）やる！」

「よっしゃ、騎馬作んぞ！」

三人の騎馬に乗ってスズカはホームスタンドのファンの前に戻っていく。大歓声で

彼女を称えるフアンの前に。

こうして11月1日、1枠1番から走ったサイレンススズカは誰よりも速くゴールし、もう一つ1を増やし、歓喜の日曜日としたのだった。

これから、彼女がどのような道を選ぶのだろうか？ どのような道を選んでも、そばに皆がいる限り、彼女は戦闘で走り続けるのだろうか。

札幌記念 墮ちた逃亡者と捕らえられなかった者

「一体、私はどうすれば良いの？ どう走れば良いの……？」

彼女、サイレンススズカは悩んでいた。理由は数日前の北海道遠征にある。

『さあ、ついにやってまいりましたサマートウインクルシリーズ最大のレース、札幌記念！ 秋のG1シリーズを見据えた芝2000メートル戦！ なんといつでも注目は10か月ぶりの復帰となる昨年の宝塚記念、天皇賞・秋の勝ちウマ娘のであるサイレンススズカ！ 天皇賞後に発覚した怪我によりレースからは離れていましたが昨年の有馬記念、今年の宝塚記念共にファン投票で1位に選ばれました！ 復帰を心待ちにしていたファンが訪れた札幌レース場は超満員！ URAからの発表で動員記録が更新されたそうです！』

レースはいつも通りスズカが後続を突き離す展開になった。異変が起こったのは第3コーナー、突然スズカの脚が鈍ったのだ。第3コーナーからゴールまでが短い札幌

レース場だったので何とか3着に残ったものの、秋のG1シリーズに不安の残る一戦になった。何よりもスズカ自身へのダメージが大きかったのだ。札幌記念やその先を想定した練習では2000を逃げ切る事が出来ていたし、それ以上の距離の模擬レースもこなせていた。実際、実績を積んだスペシャルウィークにも先着で来ていたのだが、本番で脚色が悪くなった。その理由が彼女には分からなかったのだ。

「スズカ、お前にお客さんだ」

練習の途中でトレーナーそう告げられたスズカ。

「スズカ個人に客？ 珍しくね？」

ゴルドシップの言う通り、ウマ娘個人への来客というのはあまりない。取材は合同会見、敷地内は原則関係者以外立ち入り禁止なので来客は家族位なのだが、スズカの母は彼女のデビュー直前に亡くなっている。

「誰ですか？」

「行けば分かるさ」

寮の応接室にやって来たスズカは待っていた人物を見て驚いた。

「や、スズカ。久しぶり」

「サニー……あなたもウマ娘なのに来客？」

サニーブライアン。スズカと同期であり三冠レースで皐月賞とダービーを制した二冠ウマ娘。逃げの戦法を得意とするスズカが唯一捕まえられなかった相手である。

「脚の怪我で引退したからね」

「そ、そうだったの……ごめんさい」

「気にしないで。怪我の間は迷ってたけど、去年のスズカの走りのお陰で諦められたから」

「諦められた？」

「うん。完成したスズカの走りをされたら、私がどれだけ頭を捻って作戦を考えても勝てないだろうからさ。なら、スパッと辞めた方がカッコいいじゃん？」

笑いながらそういうサニー。

「私は……そこまで割り切れない」

「……だよ。私もそうだった。やりたい事は見つけたのに、もう一度レース場に走りたいって思った。でも、練習に復帰しても前みたいな走りは出来なくて、どうすれば良いかを考えていた時、スズカのレースを見て同じスタイルの君に勝手に夢を託したんだ」

「夢を託す……」

「そ。もつと走れたかもしれない私の、負け続けながらも走り続けたかもしれない私のね」

きつとそれは、親が子供に託すような、アマチュアスポーツのエールの交換のようなものだろう。

「これはスズカは気にしなくても良いよ。私の心の落としどころだから」

「私は……走れなくなるのが怖い。まだ、走っていたい。まだ、諦めたくない」

「諦める必要なんてないよ。札幌記念のスズカは去年と遜色なかった」

「でも、第三コーナーであの痛みがもう一度来るんじゃないかって……」

誰にも言えなかつた心の内を涙声になりながら語るスズカ。チーム内で憧れの存在だった彼女にとって弱音が吐ける相手が居なかつたのだ。

「分かるよ。私もレース中の怪我を味わつた身だし、治つたと言われてもまた来るかもつて身構えるよね。特に怪我をしたのと同じ地点だと。うーん……スズカ、次走は？」

「えつと、オールカマーか毎日王冠から天皇賞をを考えてるけど……」

共に天皇賞・秋の前哨戦として使われるレースであり、強豪ウマ娘達が秋の初戦として使うのでレースのレベルもG1並みになる事でも知られる。

「両方スキップで直接天皇賞行こう。ギリギリまでトラウマの治療に充てる」

「ちよ、ちよつと待つて！ サニーは一体どういう立場なの？」

「今はチームの垣根を超えたアドバイザーかな。勉強したでしょ？ ウマ娘の関連職業優遇制度。いずれはトレーナーになって帰ってくるつもり」

華やかな世界にいる彼女達もやがては引退する。そして一生というのはそれからが長い。完全に競技関連から離れる人も多いが、裏方に回る人も少なからずいる。

しかし、裏方は専門職なので、かなりの勉強がいるのだが、現役中に得た知識という形で学んでいる事も多い。有用な人材を早期育成という面も含めて、現役のウマ娘を支える職業に引退した娘たちが就きやすくする制度が『関連職業優遇制度』なのだ。

「でも、トレーナーになったウマ娘って聞いた事無い」

「大体は故郷に戻つての幼年期育成に携わるつてのが多いらしいよ。でも、私はお節介焼きだからさ。現役の皆に関わりたくないんだよね。で、ちよつと前に東条さんに呼び戻されたんだ」

「そういえば、タイキシヤトルが短距離に専念した切っ掛けが当時二冠を取つて世代の代表になったサニーに相談した結果というの本人から聞いたわ」

事、レースの戦術とウマ娘達に合った走り方を見極める目に関してはトレーナー側からも認められていて、チームに属さず、世代の頂点にまで上り詰めたのだ。

「あー、怪我で時間があつた時期に色々相談を受けたことがあつたね。シヤトルはダー

ト路線、天皇賞・秋への挑戦とかもあつたけど、彼女はスプリントマイルがベストなんじゃない？ とは言ったね。去年の毎日王冠に出て欲しかったなあ」

リゲルの問題（エルコンドルパサーとグラスワンダーとレースが被る、短距離専門が少なく、前週にスプリンターズステークスがあつた）もあつて、実現しなかつたが、もしもシャトルが参戦していれば、どうなつていたか分からない。

「それは楽しそうだけど、厳しいレースになつたと思うわ」

「だねー。……よし、タイマンを毎日やろうか。時間は……夕方5時位から。第三コース左回り、距離は1600から始めていずれば2000メートルかなあ」

「それがトラウマの治療になるの？」

「なるかもしれないけど多分ならないね。結局はスズカが乗り越えないといけない事だから。多分、結果はどうあれ天皇賞を全力を出して走りきらないと治らないと私は思うよ。けど、G1なんだ。私はスズカに勝つてほしい。私のわがままでけど、怪我したスズカを終わつた存在にさせたくない。だから、2冠を獲つた私の頭でスズカを進化させたいんだ」

「進化……それは良く分からないけど、私は勝ちきれなかつた時、サニーの走りに憧れたの。全てを使って何が何でも勝ちに行く走り」

「華も能力も足りないだけだよ。自信があつたのはスタミナだけだつたし、実際、大きい

所は2冠だけだし」

サニーの生涯戦績は10戦4勝でメインレースでの勝ち星は皐月賞とダービーだけである。しかも両方とも人気薄での勝利だった。ダービー前に彼女が言った『一番人気じゃないのは別に良い。一生に一度なんだから、ダービーの1着が欲しい』という言葉は勝負師の彼女を表す言葉としてピッタリだと、学園内でもちきりだった。

「逃げの戦法を始めたのはあなたを見てなのよ？ 慣れるまで時間はかかったけど」

「ありがたいけど、スズカの場合スピードの絶対値が違うだけだからなあ。私的に逃げとして合格なのは宝塚〜天皇賞の3レースだよ」

「厳しいわね」

「んじゃ、スズカに戦術のいろはもついでに教えちゃおうかな」

ターフを駆ける異次元の逃亡者の復活はターフを駆けた天才勝負師の頭脳に託された。サニーブライアンをよく知る同期達はこの話を聞いてサイレンスズカの復活を確信した。それは他ならぬ自分達が彼女の相談を切っ掛けに成長出来た事を理解しているから。

天皇賞・秋 先輩の意地

「さて、天皇賞・秋。大本命は凱旋門賞2着からのエルコンドルパサー、対抗に毎日王冠を勝ったグランプリウマ娘のグラスワンダーに札幌記念を勝ったセイウンスカイ。京都大賞典の惨敗が気になるけど、体を絞ってきて、スズカと一緒に走りたがっていた、天皇賞春秋連覇を狙うスペシャルウィーク。相手は強敵ばかりで厳しいけど……私のダービー前以来の四暗刻緑一色が来たし、問題ないでしょ。頑張れ、スズカ」

ターフ入り前の地下道に私は居た。

「そういえば……」

「どうしたんですか、スズカさん？」

私の横には苦しかったこの1年間一緒に居てくれた、スペちゃん。1年越しの約束が叶った形だ。

「去年はこの辺で左の靴紐外れたなああって思い出したの」

今思うとあれが故障の予兆だったのかもしれない。でも、今は何も起こってない。きつと……何も起こらない。

「そんな事があつたんですか？」

「ええ。……ずつと練習別メニユーだったけど、スペちゃんの調子は？」

「……分かんないです。ダービーの時に近付けるようにダイエツトはしてましたけど、どうなるか……」

スペちゃんは私のせいでレースへの集中力を欠いた状態で宝塚でグラスちゃんに負けてから調子を崩している。秋の始動戦でも7着に負けて、ベストだった状態を思い出すためにダービーの頃に近付けるメニユーを行っていたらしい。

「スズカさんはどうですか？」

「体調は良いと思う。後は気持ちだけ。誰よりも速くゴール板を超える事だけ」

その為に私は大櫓を超えないといけない。サニーの為に、私を応援してくれる人の為に、何より自分の為に。

「そうですね！ 誰よりも速く駆け抜ける、それだけですわね！ 私もサニーさんに相談してヒントを頂きましたし！」

サニーはいつの間にかスピカの皆とも仲良くなっていた。あの気まぐれなゴールドシツプすら制御できるのだ、トレーナーはピツタリかもしれない。

スペちゃんの『ダービーの頃を思い出す』というプランもサニーが言った、「不調の時は良い時を見て思い出せばいいよ」という言葉が切っ掛けだった。

「スペちゃん、全力で頑張りましたよね」

「はい！」

『過去最高と言っても良いレベルの出場選手がそろった天皇賞・秋！ 連覇のかかるサイレンススズカか？ 春秋制覇を狙うスペシャルウィークか？ 世界に名を轟かせたエルコンドルパサーか？ グランプリ連覇のグラスワンダーか？ 二冠ウマ娘のセイウンスカイなのか？ シニアクラス最高の栄冠を賭けて、間もなくスタートです！』

ゲートが開かれてスタートを切る。私はいつも通りの先頭だ。レース前にサニーに言われた事を思い出した。

『逃げつてのは基本的に繊細な物なんだ。後続の馬との差、自分の最後の差し脚、諸々を計算に入れてレースを組み立てなきゃならない。綺麗にはまったのが私の2冠だったり、去年のセイウンスカイの菊花賞だな。だけど、スズカは違う。君はスピードの絶対差で勝手に逃げを作れる。それは皆知ってる。そこを上手く使えば簡単に勝てるだろうよ』

それを聞いた時、彼女が学園に戻って来てからスピカのトレーナーを含めた何人かの

大人と麻雀をして、勝ちまくっている事を知っている私としては勝負師としての彼女のここ一番の勝負勘があつて成立する事だと思つた。

(今回一番厄介なのはセイウンスカイ。ペースを乱されると途端に厳しくなるけど……)

『セイウンスカイは札幌で沈んだスズカを見ているから大逃げを打つても「前回より差を付けようと考えている」、途中でペースを落としても「もう限界」と思うはずさ』

負けから学ぶ。三冠レースの頃は当たり前だった事を札幌の後に久し振りにした。それから一步進んで負けを活かす方法をサニーは教えてくれた。

『前半1000メートルを通過！ 先頭はサイレンススズカ、去年とほぼ同等のタイムで駆け抜けていきます！ 少し離れてセイウンスカイ、さらにそこから離れた中団にエルコンドルパサー、グラスワンダー、スペシャルウィークは後方待機です』

『最初の1000メートルはいつも通りで良いよ。他の子のハイペースがスズカのマイペースだから。肝はラストの直線までの400メートル』

(この400メートルで一息入れる。そうすれば)

「一流と超一流の差は回復力。スズカは当然超一流。1ハロン(200メートル)11秒台をマイペースで出せるスズカが12秒台後半で2ハロン息を入れれば、最後まで粘れるし……」

『最後の直線に向いた！ 先頭はサイレンススズカ！ すぐ後ろにはセイウンスカイ！ 中団からエルコンドルパサー、伸びて来た！ その後方、グラスワンダーとスペシャルウィークがものすごい脚で突っ込んで来る！ 5人の大接戦！ だれも先頭を譲らず最後の坂を登る！』

横から足音が聞こえる。誰もが一着を、センターを狙っている。ただ、私には一つの思いがあった。というのも昨日の最後のミーティングでサニーの立てたレース展開の予想がぴたりと当てはまっていたのだ。ここまで来ると凄いを通り越してちよつと怖い。

本人曰く、「私の皐月くダービーの頃以来の勘の冴えだね」らしいけど、あの勝利もプラン通りだったのだろうか？ ……これに勝てたら聞いてみよう。

「さて、皆脚色は同じ感じ。スカイはスズカの追走で、後方からの三人は追いつくための脚で一杯、スズカも決して楽じゃない。けど、スズカには私を含めた一部同期しか知らない秘密がある」

（まさか、学園に来た時の事まで引つ張り出されるなんてね）

『5者横並びで坂を登りきった！ サイレンススズカ！ セイウンスカイ！ エルコンドルパサー！ グラスワンダー！ スペシャルウィーク！ ラスト100メートル！』
「今だ！」

(ハハハ！)

『サイレンススズカ、ここで再び加速！ そして、そのままゴール！ サイレンススズカ 1年ぶりの勝利！ 史上初の天皇賞・秋連覇という偉業を達成しました！』

「……やっぱ、スズカは桁外れだわ。世代的には下の子達もヤバいけど。ま、とりあえずはおめでどう、スズカ」

「やった……」

私はゴールから100メートルほどで立ち止まり、勝利の味をかみしめる。電光掲示板を見上げるとまさかの4人同着だった。正直、私が勝った事より驚きだ。

1年前は私の走りたいように走れば勝てた。走るのが好きな私は沢山走り続けた（実績が無かったのもあるけど）。その末にパンクしたのだと思う。けど、リハビリと復活までの1年で支えてくれる人、応援してくれる人、一緒に進んでくれる仲間気付けた。走りたい理由、勝ちたい理由が出来た。留学は無くなったけど、貴重な経験で決して遠回りじゃ無かったと思う。

「スズカさん！」

「スペちゃん」

ずっと私の傍で心配してくれたスペちゃんが私の傍に駆け寄ってくる。意外と元気そう。中長距離が主戦場なだけあるなあ。

「最後、凄かったです！ あんなスズカさんの走り、初めてみました！」

「私もデス！」

「まるで私やスペちゃんのような後ろからレースをするような娘の脚でしたね」

「私より前で走って、あんなのされたら無理ですよ」

いつの間にかエルちゃん、グラスちゃん、スカイちゃんにまで捕まった。レースじゃ捕まらない自信があるんだけど。

「あれはデビューする前、学園に来てすぐに教えられた走り方なの。私の性格の問題で後ろからのレースは出来なかったけど、活かす方法はなんとなく怪我する前に気付けたの。それを札幌記念の後にサニーと体系化させて、磨いたの。これから武器として使えそう。皆のお陰で自信が付いた」

「これは厄介な人に厄介な自信を付けちゃったかなあ。私とスペちゃんは長距離に逃げれるけど」

「私とエルは対決する機会が多そうね」

「次は負けマセン！」

「次も私が勝つわ。……と言っても、怪我明けだし、今年は走るかどうか分からないけど」

秋の王道路線は毎月の末にG1が待っている。怪我明けで皆勤は厳しいだろう。

「となるとスズカさんの適距離のレースって……3月の中山記念まで無い？」

「いや、1月のAUCGがあるよ」

「あ、あのね、私に気にせず、自分の目標に向かって走る方が良いと思うよ。」

日本の最長G1である天皇賞・春に勝ったスペちゃん、二番目に長い菊花賞に勝ったスカイちゃんは言わずもがな、エルちゃんとグラスちゃんも私より長い距離で結果を出しているから、2000前後が主戦場の私と無理に合わせる必要はないと思う。

「スズカさんに勝つのが目標です！」

こういつてもらえるのも先輩の冥利ではあるのだけど、やっぱり自分の事も考えて欲しいな。

「……交わったら、きっちりお相手するわ」

彼女達4人を含めてこの世代は多士済々。そんな彼女達を相手に壁となれるのは私とシャトル位。先輩の意地も見せないよね。

ジャパンカップ 世界へ飛び立つために

「東京競馬場、芝2400メートル……ダービーと同じ。あの時私は9着だった。けど……今回は」

スズカの脚のダメージは検査の結果、大した物ではない事が判明した。念のため、ウイニングライブを欠席し2週間の休養を入れ経過を見て当初の予定通りジャパンカップを次走に選んだ。

他の有力ウマ娘で出走を決めているのは、スズカに三度目の挑戦をするエルコンドルパサー、宝塚記念のリベンジを誓うエアグルーヴなどもいるが、最も注目されているのは当年のダービーを同着で勝利し、セイウンスカイが世界レコードで逃げ切った菊花賞でも二着に入って、尚且つスズカと初対決であり、ルームメイトでチームメイトでもあるスペシャルウィークだった。

「スズカさん！ いよいよ一緒にレースですね！」

入場前の地下道にてスペとスズカ、勝負服に身を包んだ二人で話していた。

「そうね、スペちゃん。それと今日のレースは1年半前の私との勝負でもあるから」

「1年半前……ダービーですね？」

スペ自身のダービー前にスズカは自身のダービーの事を話していた。実力はあったものの、まだ完成しきっていないなかった彼女の走りとレース巧者だった同期の皐月賞ウマ娘の逃げの前に負けたのだった。

「あの時出来なかった事を今、最高の舞台でしたいと思うわ。その上で勝つ」

「簡単には勝たせません！ 春以上の走りでスズカさんに勝ちます！」

『さあ、今年も様々なドラマを生み出してきた東京レース場！ 最後の大舞台は世界のトップウマ娘達も参加する国際G1ジャパンカップ！ 選ばれた18人のウマ娘、たった一つの栄光を掴むのは誰なのか!? 日本が世界に送る至高の2分30秒、スタートです！』

抜群のスタートを決めて、先頭に飛び出したスズカ。二番手以下はメートルほど後方で控える。スペは最後方にいる。

『先頭はサイレンススズカ、持ち前の快足を活かし、後続との差をどんどんと放していく』

！ 続いてエルコンドルパサー、エアグルーヴと続きます！ スペシャルウィークは最後方からのレースですが届くのでしょうか!?」

一月前のレースを見るかのような大逃げを見せるスズカ。

『今、1000メートルを通過！ タイムは57秒5！ とんでもないタイムを見せてくれます、サイレンススズカ！ 後方集団とは15〜20メートルほどの差を付け独走！』

差を維持しながらバックストレートの坂を上り、スズカが第3コーナーに差し掛かったところで後方集団に異変が起こる。

『おおっと!? 最後方に控えていたスペシャルウィーク、第3コーナーに入った所で進出を開始！ 少しずつ順位を上げていく！ 4番手、3番手、2番手まで行った！ しかし、先頭のサイレンススズカまでまだ15メートルほど!』

本来瞬発力を活かし、最後の直線での爆発的な加速での『差し』の戦法を得意とするスズカが超ロングスパートの『捲り』を見せたのだ。これには観客からもどよめきの声がかかる。

『さあ、真つ向勝負の最後の直線！ 先頭にはサイレンススズカ！ 2番手はスペシャルウィーク！ 差は15メートルほどに縮まっている！ 3番手以降との差は少しある！ 実質2頭の勝負か!? 差が縮まりながら坂を上る!』

逃げるスズカ、じりじりと差を詰めていくスベ。高低差2メートルの坂を駆け上がる。

『坂を登り切った！ サイレンススズカ、ここで再び伸びる！ なんとというウマ娘だ！
しかし、スペシャルウィークの末脚も凄い！ 差が縮まる！ ついに逃亡者の影を捉えた！』

並んだ二人。そしてその並んだ地点が

『ゴール！ 二人並んでのゴール！ 勝者はどっちだ！』

電光掲示板の順位発表の1着と2着の所は未だに発表されていない。しかし、会場には驚きの声が上がっている。

『タイムは2分22秒！ 2分22秒丁度！ 世界レコードです！ レースの結果は写真判定ですが、サイレンススズカとスペシャルウィークが叩き出したタイムは芝2400メートルの世界記録！ ジャパンカップ史上に残る激走でした！』

「お疲れ様でした、スズカさん！」

「お疲れ、スベちゃん」

レース場から控室に戻る地下道で二人は並んで歩いている。

「それにしてもスズカさん、今日は途中でペース落としてませんでした？」

「気付いてたの、スぺちゃん？ 少しね」

スぺの指摘に驚きながら答えるスズカ。

「……東京の2400って完敗だったダービーしか走った事が無かったから、久しぶりに自分のダービーを見直したの。そうしたら、綺麗な逃げ切りをされてたから、参考にしたの。他の皆は私が好きに走ってペースがかなり早くなるって分かってたから、ちよつと緩めたのよ」

「後ろの私達は一番前のスズカさんを基準にペースを見ますからね。スズカさんが普段よりゆっくりになったら少し離れた後ろの私達はスローペースのレース展開になってスズカさん有利になりましたね」

「でもスぺちゃん、どうして私がペースを落としましたのを気付いたの?」

「それはいつもスズカさんの事、いつも見ていましたから!」

「ふふ、ありがとう」

このレースがサイレンススズカとスペシャルウィークの最初で最後のレースになるかどうか、今は誰にも分からない。

「とりあえず、一年お疲れ様スぺちゃん」

「お疲れさまでした!」

二人の3冠ウマ娘シリーズ

2冠ウマ娘と新人さん ついでに未完の大器と絶対王者

私がトレセン学園に入学した頃、トウインクルシリーズは類を見ない位盛り上がりつつあったと思う。

数多のウマ娘と同じく私もレースとウイニングライブに憧れた。子供の頃から華やかなスターウマ娘は何人もいた。地方からたき上げたハイセイコーさん、激しいライバル関係だったトウシヨウボーイさん、テンポイントさん、グリーングラスさんなど、私達の世代が憧れた物だ。けど、強さの象徴は居なかった。

日本のトウインクルシリーズにおいて、強さの象徴と言えば戦後初の3冠ウマ娘シンザンさん。大レースを獲り逃さず、当時あった大レースをすべて取った伝説の5冠ウマ娘。彼女を超える事、それがすべてのウマ娘やその関係者の合言葉にいつしかなかった。

私が入学してすぐの頃、ある一人の先輩と出会った。中長距離がメインだった日本に

において、短距離に注目を集めさせ開拓していった先駆者、『短距離の絶対王者』ニホンピロウイナー先輩だ。高飛車なお嬢様然とした風貌とは違い、非常に面倒見も良く、私の先代の生徒会長でもあつた彼女にデビュー前から目をかけてもらつていた。

「ルドルフ。貴女はあのシンザンさんを超えるようなウマ娘になるかもしれないわね」

ある時、彼女は私にそう言った事があつた。しかし、彼女達の世代には2冠を制し、3冠目にチャレンジする権利を持つていたミスターシービー先輩がいた。ウイナー先輩はシービー先輩と仲が良く、一緒に居る事も多かつたのだが、それだからこそ何故私にそんな事を言うのか分からなかつた。

確かにその当時から自分の実力に自信はあつたし、3冠を狙う心積もりではあつたが、『3冠を獲れる』などという言葉を簡単には吐けなかつた。

私のデビューが11月の末に決まつて、そこへ向かつて調整をしていた時、シービー先輩の3冠の掛かつた菊花賞の直前の事だつた。

遅くまで練習をしていた私が更衣室に戻ると、更衣室の入り口から明かりが漏れていた。誰かいるのか除いてみるとシービー先輩が一人でいた。彼女は一人で脚のアイシングをしていたのだ。それだけなら自己管理の範疇で片付けられた。けど、その横には大量のテープが置かれていた。それから考えられるのは一つだけ。あの人は脚を練習

中からテーピングでガチガチに固めていたのだ。

勝負服が珍しくロングパンツスタイルで、練習中もそうなのは慣れるためだと思っていた。けど、それは違った。痛々しいテーピングを誰にも気付かせないため。事情を聴こうと私が室内に入ろうとした時、後ろから止められた。振り向くとウイナー先輩とカツラギエース先輩がいた。

「あー、見ちゃったか。シービーの秘密」

更衣室の裏手に連れていかれた私にエース先輩はそう言った。

「先輩、シービー先輩のあのテーピングは？」

「あれはアイツの脚の爆弾をかばうためのだよ」

「分かったのはクラシック前の練習中だったかしら。それからずっとテーピングとアイシングでだましましたまじやっているの。これは他言無用よ」

あり得ない。確かに3冠レースは一生に一回だけど、治してからでもシービー先輩の実力なら大きいレースをいくつも勝てると思う。

「なんで！　なんでそんな事をしてるんですか！　おふたりもどうして止めないんですか!？」

「止まらないわよ。あの娘はマイペースだけど頑固で責任感が服を着ているような娘な

の

「アイツは自分に能力があるのを知ってる。だから、3冠ウマ娘になって自分がトウインクルシリーズの旗頭になろうとしてるんだよ」

「旗頭……」

確かに私が入学する直前のトウインクルシリーズはスター不在だと言われた。中距離までなら『スーパーカー』と謳われるマルゼンスキー先輩がいるけれど、王道路線には何年も核になる存在が居ない。

「短距離を狙った私も発展途上なエースもあの娘を止められなかった。きつと、シビーは壊れるまで走り続けるでしょうね。止められるとしたら、あの娘と同じくらい、ひよつとしたらそれ以上の実績を作れる貴女だけよ」

「私だけ……」

ウイナー先輩が言った言葉の意味が分かった。距離不安が無ければシビー先輩は3冠ウマ娘になるだろう。そんな先輩を止めれるとしたら、シンザンさんを超えるようなウマ娘じゃないといけない。ウイナー先輩は私にそれを見出したのだ。

「デビュー前のルドルフに言うのも酷だと思うけどな。まあ、あんまり気にすんなよ。お前まで怪我したら元も子もないし」

「それに脚に不安があっても、あの娘は正真正銘の怪物よ。ベストデイスタンスは中距

離までなのに圧倒的な能力とセンスでそんな物を乗り越えるんだから、私達の心配なんて杞憂かもしれないし」

そう言ったウイナー先輩の顔には不安の色があった。

シービー先輩の絶大な人気裏に最後方から最後の何百メートルで全部を抜き去る極端な『追い込み』戦法である事が理由だと言われている。派手だけど、取りこぼしもあるし、シービー先輩ならもつと前でのレースの方が安定して勝てると思っていた。けど、あの極端な戦術は距離適性を誤魔化すための苦肉の策だった。

「……1年後、無敗で3冠ウマ娘になって、シービー先輩を倒します。目標は……ジャパソカップ」

「言い切ったな。OK、私もそこまで自分の走りを完成させるか」

「エースは普段せっかちなのに一部はのんびりなのかしら？」

「私もシービーと同じでマイペースなんだよ。……ルドルフ」

真剣な表情で私の名前を呼ぶエース先輩。

「無敗って言ったけどレースに絶対は無え。シービーだって負けてる。シンザンさんだってパーフェクトレコードじゃない。それでも挑むのか？」

「はい。私が絶対を証明して見せます」

「そっか……あー、やっぱり私にシリアスは似合わねえわ。こんなのはウイナーの仕事

だろ」

「エースは普段からそうしていれば後輩からの人気ももつと出るでしょうに」

後輩人気では抜群のルックスと強さを持つシービー先輩が1番人気、才色兼備、文武両道の生徒会長ウイナー先輩が2番人気でエース先輩は3番人気だけど、マイペースで強者のオーラを持つシービー先輩やお嬢様なウイナー先輩より接しやすさでは断然上だ。

「疲れるから、やだ!」

「でしようね。ルドルフ、練習熱心は良いけど、オーバーワークにはならないようにね」
「そーそー。レースが決まってから遅くまで練習してるのシービーも気にしてたからな」

「はい……」

秘密の練習を見られていた事は少し恥ずかしい……私が先輩になったら、見ていてもオーバーワークじゃない限り言わないでおこう。

3冠ウマ娘が二人 それと世界のカツラギエース

あの日の誓いから1年。結局私はその誓いを完全には守り切れなかった。無敗で3冠ウマ娘にはなれたけど、ジャパンカップに勝てなかったのだ。……エース先輩に。

3冠ウマ娘になった後も去年のジャパンカップ、有馬記念は疲労から回避したものの、(シービー先輩の回避を受けてURRは翌年から菊花賞を天皇賞・秋の翌週から前週に変えた)今年に入って大阪杯、天皇賞・春、宝塚記念、天皇賞・秋と大レースを総なめにしてきたシービー先輩はジャパンカップを10着惨敗という結果で終えた。世間では疲労からの調整不足と言われていたけど、「脚の限界が近くて無意識に抑えたのだと思うわ。あの脚でも無理をすればそれなりの勝負は出来ていたはずよ」とウイナー先輩が言っていた。

エース先輩には完全にしてやられた。ずっと好位追走で戦っていた先輩が大逃げを打ったのだ。結局最後まで後ろの私達は先輩を捕まえきれなかった。エース先輩曰く「私の見た絶好調の時のシービーの末脚を想像してレースを組み立てたんだ。それでも先着できるような走り方を考えて実行しただけさ。ルドルフや他の皆を抑えて勝てたのは意外だったけどな」らしい。

1年の最後のG1、有馬記念。そのレース前に私はシービー先輩に話しかけられた。「ルドルフ、一年間フル参戦してみても疲れてない?」

何気なく、私の体調の事を聞く先輩。この辺はシービー先輩だけでなくエース先輩もウイナー先輩も後輩の事をちゃんと気にかけてくれている。その辺は私も見習ってきたいなと思う。

「やっぱり疲れはあると思います。でも、今年もこのレースで終わりですし、全力で走るだけです。先輩は……その……」

「私の脚の事?」

サラッと聞きにくい事を口にするシービー先輩。というか……

「私が気付いている事知ってたんですか!?!」

「声は小さくね。あの時も声が大きかったし」

何の事は無く、一年前の私が知った時から先輩には知られていたのだ。

「……ルドルフには、心配かけたね。ウイナーやエースにはもう話したけど、有馬を最後に長い休養に入るよ。もう、私一人で背負う必要もなくなったと思うし」

間違いなく、この2年の盛り上がりはシービー先輩がいたからだ。けど、ここ数か月の盛り上がりはそれに合わせて私を含めた何人ものウマ娘達の存在があつてこそだと

思う。私達はようやく先輩が一人で背負っていた重荷を一緒に持てるようになった。

「おつシービー、こんな所で盤外戦か？」

話している所にエース先輩が現れた。

「いや、このレースが終わったらぶっ倒れる予定だから、早いうちにルドルフに言っておこうと思つてね。後、ルドルフは盤外戦を仕掛けても揺れるような奴じゃない」

サラッと褒められた。シービー先輩つてあんまり誰かをほめる印象が無いから結構嬉しい。

「寝る前にちゃんと風呂入って、歯磨いて、勝負服クリーニングに出さないとウイナーに怒られるぞ」

「ウイナーお母さんに怒られるのは嫌だな。気をつけよ」

「ウイナーお母さんを怒らせると怖いからな」

このお二人はたまにウイナー先輩をお母さん呼びしている。あの、面倒見の良さから分からなくはないのだが、目の前の先輩たちはそれを言つて怒らせるのを楽しんでい
節がある。

「ルドルフも気をつけなよ。お母さん、細かい所うるさいから」

「私らが適当つてのもあるんだろうけどな」

「その辺は大丈夫です」

私はプライベートの方もかなりキツチリしているから、エース先輩に褒められたことはあっても怒られた事が無い。……最近はそれが理由からか、ウイナー先輩の後釜の生徒会長にならないかと言われている。まだ早いと思うのだけど。

「さて、そろそろレースの時間だな」

「エース、ルドルフ、2500メートル向こうでまた」

そう言つて、私より先にレース場に向かうお二人。その背中に入学した時から憧れ続けたカツコよさがあつた。いつか私もあなれるのだろうか？

『さて、いよいよやつてまいりました年末の大一番、有馬記念！ 人気投票で選ばれたウマ娘達が暮れの中山を走ります！ 今年最後の栄光を掴むのはどのウマ娘か？ 間もなく発走です！』

スタートゲートが開く。最初のポジション取りは大切だ。私は先頭を走るエース先輩の少し後ろの二番手に付けた。エース先輩を中山レース場の短い直線で捉えられるようにあまり離され過ぎず、かといつて最後の二の脚をさせるような余力を残さないといけない。ただ、JCより100メートルの延長は私有利に働くはず。

シービー先輩は……後ろから3番手といったところか。

このレース、私はどうやって走るかをずっと迷ってきた。そんな時、私はウイナー先輩に相談した。

「強い相手との戦い方？」

JCが終つて少しした頃の事、ジュニアクラスのチャンピオン決定戦が行われた辺りだったと思う。私は直接生徒会室に出向いた。ウイナー先輩が気を利かせてくれたのか、部屋には先輩が一人でいた。

「正直な所同世代でライバルが不在だったので、一番勝ちやすい戦い方をしていただけなんです」

「まあ、クラシック路線で大本命のみでライバル不在はあり得ない事ではないからね。一年前の誓いもあるし、流れを見極めてのレースをしていたと」

「はい。JCもそれで行つて、エース先輩に負けました。それで私には本当に強い相手との戦い方が無いんだと感じたのと、若干の後悔がありました。それで私には本当に強い相手と激しいライバル対決を繰り広げているウイナー先輩に会いに来たんです」

「短距離路線の盛り上がりはこのお二人のレベルの高い一騎打ちが大きな理由だと思う。」

「なるほど……なまじ頭が良くて何でも出来るから、煮詰まつてるのね。そんな事は簡単よ、それはね……」

今回、私は何もしない。何も考えない。前のエース先輩をいつでも捉えられる所に置いておいて、最後まで脚が持つ所でスパートをかける。小細工なしの私の一番強い戦い方。それで、全力を出すことがウイナー先輩直伝の「ケンカの作法」。……まさか、ウイナー先輩からケンカなんて単語が出てくるとは思わなかったけど。

『さて、レースもいよいよ終盤！ 先頭は依然としてカツラギエース、10メートルほど後ろにシンボリドルフ、ミスターシービーは後方待機のまま第三コーナーに入っていきます！ ああっと、シービー動いた！ どんどんと加速して前との差を詰めていきます！ 続けて後続の各ウマ娘が仕掛けていく！』

気持ち、後ろの足音が大きくなつたように感じる。私も少し加速して、徐々に前のエース先輩を捕まえに行く。水色の下地にピンクの蓮の花をあしらった改造和装のよな勝負服の背中を目の前において、三コーナーを駆け抜けていく。

『第四コーナーを抜けて最後の直線！ シンボリドルフ、カツラギエースを捉えた！ 内にカツラギエース、外はシンボリドルフ！』

加速している後続の仲で中で一つ凄い勢いで伸びてくる足音が聞こえる。

『後ろからインを突いてミスターシービー！ 凄い脚で突っ込んで来た！』

日本中を魅了する切れ味抜群の末脚は一緒にレースに出る身としては最後の一瞬まで気が抜けない恐ろしい武器だ。けど！

『先頭変わってシンボリルドルフ！ 粘るカツラギエース！ 追うミスターシービー！ 三人の争い！』

先頭に出て後少しなのに、凄く苦しい。走り切っていないのに体は悲鳴を上げていく。それだけ消耗するくらいミスターシービーとカツラギエースという存在は抜きんできている。今も後ろからのプレッシャーが凄い。けど、今日は、今日だけは負けたくない！

『まだ伸びるシンボリルドルフ！ 強い！ 強い！ 今年最後のG1も彼女の勝利！ まさに、皇帝！ シンボリルドルフ！』

「お疲れ、ルドルフ」

早くも呼吸を整えて私の元に来てくれたシービー先輩。そういえば、「人前では弱い姿は見せられない」って教えてくれたのは先輩たちだったなあ。

「お疲れさまでした、先輩」

「今度は私達がルドルフに挑む番だね」

「……待ってます。それまでトップで居続けます」

先輩が帰ってくるまで勝ち続ける。それが私の『皇帝』としてのプライドだ。

3冠ウマ娘が二人 さらにマイルの皇帝さん

『クラシック戦線も終わり、秋深まる東京レース場。この舞台で行われるのはシニアクラス最高の栄誉を賭けての天皇賞・秋。様々な路線のトップ達が集う中、最も早くゴールを駆け抜けるのは誰なのでしょうか!? やはり大本命はシンボリルドルフ! 昨年のジャパンカップから負けなし、堂々としたレースはまさに『皇帝』の名に相応しいでしょう! 対抗は『マイルの絶対王者』ニホンピロウイナー! 今年は『スーパーカー』マルゼンスキーを抑えて春の短距離G1を完全制覇! 秋初戦の毎日王冠も快勝で2000メートルへの挑戦を発表し、シンボリルドルフとの夢の対決が実現しました! しかし、今日の主役はこの人! 『魅惑の末脚』ミスターシービー! 昨年の有馬記念後に故障による長期欠場を発表してから10か月、いよいよファンが待ち望んだ復活となりました! 私達を魅了するあの末脚は再び爆発するのでしょうか? 天皇賞・秋、間もなくスタートです!』

「シービー、流石の貴女も久し振りのレースで緊張しているのかしら?」

「……そう見える？」

東京レース場の地下道にて勝負服のウイナーとシービーが並んで話している。久し振りのレースなのだが、シービーの顔には笑みが浮かんでいる。

いつも一番人気で最後の入場が当たり前の二人だが、今回は後輩のルドルフにその座を譲っている。

「一応、聞いてみただけよ。貴女はどんな大舞台でもいつもと変わらないわよね」

「どんなレースだろうと、誰が相手だろうと、私は私の走りをして、見に来てくれた人を楽しませる。それだけだよ」

「私達が最高のパフォーマンスをしてトウインクルシリーズを輝かせ、その中で私達が最も輝く。それが私達『チーム・シリウス』よね」

ミスターシービー、ニホンピロウイナー、カツラギエース、そして、アメリカに遠征中の留学生で構成された少数精鋭の現在最強チーム、シリウス。

何物でもなかった彼女達が自分達のパフォーマンスをする場を自分で選ぶために作り上げた場所であるから、他の選手よりチームという物に愛着がある。だからこそ、層の厚い東京2000メートルの栄光が欲しいのだ。

「エースを始めとした海外遠征組に胸張って結果を言えるように頑張らないとね」

「そうね。……たとえ貴女でも勝利は譲らないわよ」

「当然。勝利は自分で勝ち取ってこそでしょ」

『3人のチャンピオンが集った東京レース場、2000メートル先の栄光を掴むのはルドルフかウイナーかシービーか！』

はたまたま世紀の下克上が起こるのか！ 天皇賞・秋スタートです！』

レースはウイナーが引つ張る展開になった。2000メートルになった天皇賞・秋には、マイラーから中距離、ステイヤーまで幅広い距離のトップレベルが顔をそろえる。求められる資質と得意な戦法の関係でウイナーが先頭に立つのは必然だったと言える。

『二ホンピロウイナーが先頭で第三コーナーに突入します！ しかし、ルドルフを始めとした後続の各選手が虎視眈々と狙っているぞ！ シービーは未だ最後方、10か月ぶりは厳しいのか!』

沢山のスパイクが地面を蹴る音とG1の大歓声。鮮やかな芝の緑と色とりどりの勝負服。芝と土の香り。私は大好きなこの舞台に帰ってきた。後は結果を残すだけ。

脚に痛みはない。

大きく息を吐き、大きく息を吸い込む。さあ、後は最後の直線、誰のものでもない。私
が魅せる舞台だ。

『最後の直線に入り、ミスターシービーが一気に来た！ 前を走る選手たちを抜き去り、先頭争いをしているウイナーとルドルフに襲い掛かった！』

あー、私の脚もここまで素直に伸びてくれる。こんな事なら、去年の天皇賞・春と宝塚をスキップしておけばよかったかな？

でも、去年の私がいたから体の調子を崩したルドルフが宝塚をスキップしても特に批判が起こらなかつたんだと思うし、これで良かったのだと思う。

『坂を登り切り、先頭が変わってシンボリルドルフ！ ニホンピロウイナーも粘る！

しかし、ミスターシービーが捉えた！ そして、まだ伸びる！ 差し切った！ ミスターシービー、主役は自分だと主張するような激走で復活の勝利です！』

ゴール板を超えて少しずつ減速し立ち止まる。そして、私は10万人以上のお客さんがいるスタンドを見た。

ああそうだ、私がテレビで初めて見たトウインクルシリーズもゴール後こんな感じだった。小さかった私にはそれが輝いて見えた。

向こう側からこつち側へ、憧れは現実になった。今は私が誰かの憧れになる番。

……なんて、少し大袈裟かな？ とにかく今は久し振りのウイニングライブを楽しみましょうか！

海外ウマ娘シリーズ

ウマ娘昔話

むかしむかし、イギリスの片田舎に一人のウマ娘がいました。生まれた日が日食だった事から、その現象を意味する「エクリプス」と名付けられた彼女は成長すると沢山の人の目を引き付ける美貌と圧倒的なレース能力を持つウマ娘に成長しました。

その当時、ウマ娘は草レースや貴族が開くレースに出る事で見初められ、貴族のスポンサーが付く事が目標であり、どれだけ地位の高い人に見初められるかが彼女達の中のステータスでした。

ウマ娘という存在も今のようないレースや歌は副業で、パーティーに共に出席したりと社交の華としての役割がメインであり、貴族を着飾るステータスの一つでありました。

そんな中、彼女は生まれ育った街の酒場の看板娘として、楽しい時間と歌を提供していました。時が経つにつれ類稀なる美貌と、人を引き付ける歌声が噂となり、遠くからも彼女に会いに来る人が現れるようになりました。

他のウマ娘とは違い、レースに出ず、着飾る事も無く、日々を生まれた時から知って

いる人達と過ごしていた彼女にある一人の貴族がやってきます。

社交界で『変人』と呼ばれる彼は貴族の嗜みであるレースは結果を楽しみ、ウマ娘には目もくれない。美しい歌も興味を示さず曲の良さを褒める。パーティーで食事を楽しみ、所領内の店に入り浸る。おおよそ、貴族の常識から外れたその男は何故かエクリプスに興味を持ち、供を連れず彼女のいる街にやってきます。

「あら、こんな田舎の酒場に貴族様がいらしゃるなんて。明日は雨かしら？」

「俺も社交場とレース場以外でウマ娘を、しかも働いているウマ娘なんて初めて見たぜ？」

「すこしピリピリした空気が酒場に広がっていきます。野次馬に來た街の人々も息をのんで見守っていました。」

「なんで貴族様の為に走らなければならないのかしら？ 走る事なんて自分のやりたい時にすればいい事よ。私からすれば、飼われる方がどういふ神経しているのか分からないわ。私は自分で立って歩けるもの」

「……ま、そうだな。爺がウマ娘の地位向上の為に始めた事が、いつの間にか生産性の無い所になつちまつたからな」

「この貴族の祖父がウマ娘の働き口と所得の上がつた庶民の娯楽をとという考えでレースとそれに付随したステージ（今のトウインクルシリーズの原型）を作り上げ、一大産

業にした人物でした。しかし、それも今は貴族が食い物にするだけのものになってしまった。

「ああ、ダービー伯爵家つてどこかで聞いたつて思ってたなら、レースの胴元の家でしたか。私をスカウトにでも？」

「ちよつと違う。俺は爺の目指したレースを作りたい。そのためには既存のレースをぶつ壊せる能力と人を惹きつけるカリスマ性が欲しい。で、噂のウマ娘に会いに来たつて訳だ」

「噂？ ……ああ、ウチの店が忙しい理由ね。まあ、見た目と歌にはそれなりに自信はあるけど、レースはどうか知らないわよ？」

「そのへんは臨機応変にやるさ」

「ふーん……まあ、面白そうだから、今のレース界を食べちやおうか」

彼女の走りを見た彼は「俺を含め、貴族たちは見る目が無かった」と言いました。それほどエキリプスの走りは凄い物だったのです。

初めてのレースの日。当時のレース形態はヒートレースと呼ばれ、1回の競争を1ヒートと呼び、同じ組み合わせで何度か勝つ事で決着が付くというルールでした。（現

在ほど判定がしつかりしていなく、僅差の場合は同着とされ無効になつていた。これを『デッドヒート』言つたのだが、今使われている死闘、接戦では誤訳で、正しい意味は『無意味な争い』である」

「おや、ダービー伯ではないですか。あのような田舎娘を連れてきてどのようになさるつもりですか？」

「アンタみたいな田舎娘が出るようなレースじゃないんだよ！」

二人は違う場所で馬鹿にされる的でしたが、そんな言葉など耳に届いていません。

レースが始まると見ていた人間は言葉を失いました。最初から先頭に立ち、そのまま圧倒的な差を見せて逃げ切つたのです。

「皆さんに奪われたレースを私達の手に取り戻す為ですよ。あの娘はその為に見つけた私のパートナーです」

「走るのに誰だとか関係ないでしょ。そんな物でしか見れない人には負けないし、たかが4マイルでそんなに疲れているなんて、なまり過ぎじゃない？」

この時代は1ヒートの距離が数マイルでそれを何度か、一日に10000メートルを超える事もざらにありました。しかし、エキリプスにそんな事は関係ありません。息を整えなおした彼女の様子を見て、彼は観覧席を立ちました。

「レースは見るまでもないですね。順位は決まってる。Eclipse first, the rest nowhere. (エクリプスの勝ちだ、2着以下は居ない)」
 と言いました。ヒートレースは2着以下に240ヤード(約220メートル)以上離してゴールをすると他のウマ娘は失格となるのです。つまり、彼はエクリプスの第1ヒート以上の圧勝を予想したのです。

そして、その言葉通り彼女は勝ちました。これが二人の伝説の幕開けとなったのです。

この後、彼女は圧倒的な競争能力と美貌、カリスマ性をもってイギリスの国民的アイドルとして、貴族の物だったレースをたくさんの人々の物にしていきました。

レース体系も今のような短い距離から長い距離までを走れるようにし、今までスポーツの浴びなかったウマ娘たちや少女たちも戦えるようにしていきました。(ヒートレースの頃は超長距離を戦うために完成した肉体が必要なので、成人したウマ娘しか走る事が無かったです)

『Eclipse first, the rest nowhere.』

彼女の代名詞となったこの言葉は後に「唯一抜きんでて並ぶものなし」という意味で使われるようになります。

それは彼女の実力を指すのかもしれない。あるいは、彼女が今に続くウマ娘文化を作り上げた事に対する最大限の敬意なのかもしれない。

幼馴染襲来!

「おハナさん、明日お休み貰つてもよろしいかしら?」

ある日の練習終わり、皆の前でマルゼンスキーがそう言った。

「うん? 病院の日はまだだったはずだが……」

マルゼンスキーはその競争能力と引き換えに慢性的な脚の故障を抱えており、定期的に病院で検査をしてしつかりとケアをしている。この知識を故障をした後輩や、ケアに疎い新入生に教えているから後輩にも慕われている。

「脚は大丈夫ですよ。幼馴染がアメリカから来るので」

「まあ、多すぎる練習量はお前にとっては毒だからな。一日と言わず、何日間か休んでも構わないぞ」

普段から練習熱心であるが、爆弾も抱えているため、マルゼンスキーには他のウマ娘達よりも休みが多くなっている。そういう日もサボらず練習の手伝いに来る辺り、彼女らしいのだが。

「まあ、あの子も時間が出来たとはいえ、まだ現役ですからね」

「なら、練習に「マルちゃ〜ん!」」

そう言って練習コースのスタンドを凄いい勢いで駆け下って来る影が一つあった。その影はマルゼンスキーに向かって飛び込む。マルゼンスキーはそれを……

「「「避けたあ!?!」」」

「ぶへっ」

変なうめき声と共に地面に突っ込む黒い影。周囲はあの速度で突っ込んで怪我がないのかと内心心配に思っているのだが、突っ込んだ本人は

「もう、受け止めてよ」

とすぐに起き上がりマルゼンスキーに文句を言った。

「だって、危ないじゃない。それに、シア? 貴女来るの明日じゃ無かったかしら?」

「ハリケーンが起こったから明日だと飛行機が飛ばないかもしれないって思っただけ、一日前倒しにしたんだ。ここに来たのはサプライズ!」

「まあ、私はともかく他の娘達は驚くでしょうね」

エルコンドルパサー、グラスワンダー、タイキシヤトル、ヒシアマゾン、それにシンボリルドルフはこのマルゼンスキーの幼馴染が誰か気付いているらしく、開いた口が塞がっていない。(流石にグラスとルドルフは手で隠してはいるが)

「あの、マルゼンスキー先輩?」

「どうしたの、グラス?」

「あの人、シアトルスルーさんですよね?」

「ええ」

「『あの』シアトルスルーさんデスカ?」

「エルの言う『あの』が何かは知らないけど、現役のウマ娘でシアトルスルーはあの娘だけだと思うわよ」

「『The American dream』のシアトルスルーさんデスカ?」

「アメリカではそう呼ばれているらしいわね、シャトル」

「タ、タイマンだ!」

「ダートメインのシアと芝のアマゾンが戦っても仕方ないと思うんだけど。それよりもシア、挨拶」

「はいよく、日本の皆さんこんにちは! アメリカでウマ娘やってる、シアトルスルーです! 日本にはマルちゃんと一緒に観光するために来ました! よろしくね!」

黒髪シヨートのマルゼンスキーに負けず劣らずの美少女、シアトルスルーは長いアメリカウマ娘史上唯一の無敗の3冠ウマ娘である。あまり裕福ではない家庭から、地元のとれセンに通い、そこから栄光を掴んだ事から『The American dream』と呼ばれ、今やアメリカ中のウマ娘の憧れとなっている、正真正銘のスーパースターである。

「あの一、シアトルスルーさん？」

「呼び捨てで良いよ、シンボリルドルフ。あの時の脚の怪我は大丈夫？」

ルドルフはかつてアメリカ遠征をしたのだが、芝コースを横切るダートコースに足を取られ怪我をして遠征を中止したという過去がある。

「え？ ええ。もう完治しています。でも、どうして……」

「そりゃ、マルちゃんが行った国だからね。注目はしてたんだけ。それに私と同じ無敗のクラシック3冠ウマ娘だったし」

「なるほど。マルゼンスキー先輩とは長いんですか？」

「そうだね。お互いが話せるようになる前からの付き合いだよ。アメリカのマルちゃん家のお屋敷でお母さんが料理人として働いていて、お互いのお母さんが仲良いから、自然とね」

マルゼンスキーの実家はアメリカでも有数の名門であり、彼女自身かなり期待されている。しかし、ガラスの脚故にある程度力を加減してでも勝てるレベル（世界水準になった現在からは考えられないかもしれないが、マルゼンスキーの留学当初の日本と世界の差はかなり大きかった。アメリカのジュニアクラスでもトップレベルと目されていたマルゼンスキーはまさに黒船だったのだ）だった日本に留学を決めた。

「あ、そうだマルちゃん」

「どうしたの?」

「マルちゃんつてダート走れるよね?」

「あつちはそれがメインだから、それなりにはね。今すぐ勝負は流石に無理よ。脚の事もあるし、今日のメニューも消化したし」

実はマルゼンスキー、WDTに出走しているので芝の活躍の印象が大きいが、ダートも走れる二刀流なのだ。むしろ、日本は芝中心というのを知って途中から練習し始めたという経緯もあり、以前はダートが本業だった時期もある。

「そんな、私が有利な事言わないよ。実はね12月にも日本に来ようかなって思ってるんだ」

今までのフレンドリーな雰囲気から一変、流石は3冠ウマ娘と言った引き締まった表情を見せるシアトルスルー。

「……なるほど、アメリカ3冠ウマ娘が日本に襲来つて訳ね」

そう、年末には中京レース場で日本の中央レースの中で2つしかないダートG1の1つチャンピオンズカップが行われるのだ。

「そういう事。私としてはさ、現役の間にマルちゃんと戦いたいんだよね。時間はかかったけど、ようやくわがままを言える位の實力を手に入れられたから、直接日本に乗り込もうかなって思ってた。今回は宣戦布告ついでに観光しに来たんだ」

「そう……分かったわ。しっかりその日に向けて準備しておくわ」

数日後、アメリカから世界に『シアトルスルー、日本へ参戦決定！』の報が発信された。日本独特のダーツの前に本場のウマ娘達も負けていたから、世間では『アメリカの威信を賭けた遠征』なんて言われているが、真実は当然の本人達とリゲルしか知らない。

消えたヒロイン

ウマ娘達がスターダムに上がるのはどのタイミングだろうか。

日本なら勝負服の着る事の出来るG1での活躍だと言える。しかし、海外は日本よりもG1の数が多いので一概には言えない。だから、G1の中でもダービーなどの特別なレースや凱旋門賞などの世界中が注目するレースで勝つ事が条件だと言える。しかし、スターになる事が決して彼女達にプラスになるわけではない。

「はあ……」

ここは、イギリスのとある場所。ここにはイギリスを主戦場として活躍するウマ娘達の学園の寮の一室。そこで一人の少女がため息を吐いていた。

彼女の名前はシャーガー、ヨーロッパのレースの最高峰、ダービーを史上最大着差で勝利したのを皮切りにいくつもの大レースを勝ち、一気にスターに駆け上がった少女である。いわば今のヨーロッパのトウインクルシリーズ人気を一身で集めている存在なのだ。

なぜ、そうなったかという、ヨーロッパにおけるマンネリ化が原因だった。

ここ数年、世界的なトウインクルシリーズ人気はアメリカの方に集まっている。3人のトリプルクラウンを含め、スター揃いのアメリカに比べるとヨーロッパ勢はやや格落ちの感が否めなかつた。そこに現れたのがシャーガーというスーパースター候補。ヨーロッパのファンの注目を集めるのも仕方がない事だろう。

しかし、抜きんでたレースセンスを持つ彼女だが、ダービーに勝つまでは目立たない存在であり、彼女自身目立つのを好まない性格なために今の状況にストレスを感じ、練習以外は部屋に閉じこもっているのである。

「大分、字読みにくくなつて来たなあ……」

練習以外はずっと読書をし、本に書かれた文字が読みにくくなつて日暮れに気付く、そんな生活を続けている。

逃げだしたい。それが彼女の本音。しかし、彼女には周囲の人たちが自分にかかる期待が分かっている。だから逃げられない。

「誰かここから連れ出してくれないかな……なんて、そんな物語みたいな事あるわけないよね」

「あるかもよっ!」

彼女以外に誰もいない部屋に男性の声が響いた。シャーガーはその声が聞こえた方、

つまり窓の方に目線を向けた。鍵をかけていた窓は開けられその縁に立っていたのは黒のシルクハットに黒のスーツ、目元だけを隠したマスクを付けたシャーガーとそれ程変わらない年齢の男性。

「だ、誰？」

「イギリスの至宝を盗みに来た怪盗……って所かな」

「怪盗さん……でも、どこかで聞いた事のあるような……」

不用心にも怪盗を名乗る男に近づくシャーガー。マスクの奥の綺麗は灰色の瞳と帽子の下に見えるブロンドの髪。彼女には一人心当たりがあった。

「もしかして、デテイクさん？」

「正解」

マスクを外した青年は彼女がよく行く古本屋の主人。寮の近くの通りの外れにあるその店を彼女は気に入っており、目立つようになるまではかなりの頻度で通っていた。もちろん本が目的だったのだが、この容姿の整った青年がいた事も少なからずあった。

「でも、どうしてこんな真似を？」

「副業かな。イギリスの誇る将軍様の依頼だね。ま、名前は隠してほしいみだから秘密だよ。時に、僕のフルネーム知ってる？」

「ラウール・デテイクさんですよ」

「そう。で、それはある有名な作品の登場人物から取られているんだ。今の状況もある意味ヒント」

「アルセーヌ・ルパンですか？ ラウールはアルセーヌの幼い頃の名前、デテイクは最初の妻の苗字だったはずです。つてまさか」

「そ、僕はアルセーヌのひ孫にあたる存在さ。もちろん、泥棒はやってないよ。色々と技術は爺さんや父さんに叩き込まれたけど、初代以外は普通に暮らしてる」

「でも、あれは空想のお話じゃあ……」

「パリで古物商をやった爺さんがルパンと知り合いで、うだつの上がらなかったルパンに爺さんがルパンを紹介して書かれたらしいぜ」

思わぬ裏話に驚きの表情を浮かべるシャーガー。

「さて長居はこの辺にして、さらわれてくれますか？ お嬢さん？」

芝居がかった仕草で手を差し出すルパン4世。

「よろしくお願ひします。怪盗さん」

その手に自分の手を重ねたシャーガー。

そして二人はイギリスの夜に消えていった。

『シャーガー、誘拐される』

このニュースは瞬く間にヨーロッパ、全世界に広がった。イギリスの威信を賭けた捜索は実を結ばず、この事件は迷宮入り。様々な憶測が流れながら、未だにエイプリルフルのネタになる伝説のなったのだ。

「しかし、将軍様も無茶な相談をしてくれるよ。風の噂でしかないルパン一族にアポを取ってほしいだなんて」

「麗しの珊瑚に頼んで正解だったよ。で、彼女は今どこに？」

「先祖の愛した極東の地らしいよ。4世には場所をちゃんと聞いてるから引退したら会いに行こうね」

「セラ、これ何処の本棚に置けばいい？」

「左から三番目の所に空気があったと思いますから、そこをお願いします」
「了解」

東京は府中市、東京レース場のほど近くにある店主こだわりの紅茶と本を楽しむお店「エプソム」。美男美女の夫婦で切り盛りするこのお店には一つのジंकusがあります。

それは『ここを最良にしたウマ娘は大活躍できる』という物です。世界でも権威のあ

るレースの一つ行われるレース場を冠したこのお店にはたくさんウマ娘の笑顔が溢れています。そして今日もカランコロンとドアの開く音と共にお客様がやってきます。

「いらっしやー」

極北からの風

「さむっ……」

約一年ぶりの帰郷での一言目がそれだった。

今日私はアメリカ遠征を怪我という不本意な形で終えて帰ってきた。

正直、カナダのレースレベルはアメリカやイギリス、フランスなどの国に比べるとレベルが落ちる。ジュニアクラス時に能力を認められた私はアメリカ遠征を勧められた。不安もあつた中、その勧めを受けたのは『カナダの代表として私の実力を見せつける』という、ただの意地からだつた。

人よりも小柄な私の体に見合わない大きな誇りをもって单身挑んだアメリカ遠征はクラシック2冠という成果で大成功となつた。

練習メニューからレース選択、宿の手配や食事管理まで全部ひとりでやったのは大変だつたけど、勉強になつた。

素晴らしい結果の反面、今の私は完全に燃え尽きている。シニアクラスのレースに参加という選択肢もあるけど、アメリカはどちらかというとジュニアークラシックの路線の方が層が厚い。シニアの大レースは秋の祭典、SCデー位なものだ。(SCはステー

ツカップの略で各州に1つあるトレーニングスクールの代表が様々なジャンルのレースで実力を競い合う世界でも最大級のお祭りである。毎年8・9月に予選としてのレースが開かれ、10月の終わりに行われている)

「これからどうするかなあ……」

確かに遠征は怪我で終わつた。けど、遠征の目的、私のアイデンティティみたいなものは達成できたと思う。だから正直な所、次のモチベーションが見つけられていないのだ。

アメリカやカナダの関係者、同期の皆に先輩や後輩たちは私に復帰して欲しいらしい。誰かと一緒に走りたいとか、輝くステージの真ん中に立つて歌いたいとか、ウマ娘の本能みたいなのはあるのだけど、今の私はそれが魅力的には見えないでいる。

身の振り方をどうするかを考えていた私はいつの間にか小さい頃よく走っていた公園に来ていた。

そこそこ広い芝生のエリアの中にくつつかのベンチと遊歩道があつて天気がいいときは散歩をしている人やピクニックに来ている人もいる近所の人の憩いの場。まあ、雪が積もっているこの時期は私のような変人か元気のいい子供たち位しか来ないのだけだ。実際今も小さいウマ娘二人が走り回っている。

その娘たちを見ながら、数年前の私も多分あんな感じだったんだろうなと、年寄り臭いことを思ってしまった。久しぶりの地元だからなのかな？

「おねーちゃん、寒くないの？」

いつの間にか近寄ってきた子供たち。話しかけてきたのはショートカットで元気そうな可愛い子。その後ろには少し長めの髪綺麗な子。帽子とマフラーで気づかれてないとは思うけど、騒ぎになることだけは避けないと。

「平気だよ。おねーちゃんもここの生まれだからね」

「あの……ノーザンダンサーさんですよ？」

地元の子供にまで顔と名前を知られるようになったのはちよつと嬉しい。

「ノーザンダンサーってこの町出身の凄いウマ娘でしょ！ 私もなりたい！」

「私のこと知ってくれてるんだ」

「多分、カナダの子たちは貴女の事をスーパースターだと思ってますよ。もちろん私も」

二人のキラキラした目が眩しい。……こんな目をした子たちにもつと会ってみたいな。

「何かが見えた気がする」

私の独り言に目の前の二人は後ろを振り向く。

「? 何もないよ?」

「そうじゃないよ」

ショートカットの子の頭を撫でながら、そう答えた。私が見たいのはゴール後の風景でも、ステージからの後継でもない。目の前の少女たちのような夢を持った子の道しるべを作って上げる事。それで、彼女たちが私のようにこの街から羽ばたいていくのを見る事なんだ。

道は私を作るのだ。ここから世界へ続く道を。

「二人の名前、教えてくれるかな」

「私はヴァイスリージェント!」

「ニジンスキーです」

「私はノーザンダンサー。雪が解けたら、この街で君たちのような私に憧れている子達の先生になりたいと思ってるんだ。もしよかったら、私の学校……なんて大したものじゃないけど、来ない?」

「うん!」

「ならば、来年の5月27日のお昼にここで会おうか。その時までには君たちのための場所を用意しておくよ」

これは一人の少女の小さな一歩だった。しかし、彼女のこの一歩が数年後世界を席卷する事を誰も知らない。

「そういえば、どうして5月27日なの？」

「私の誕生日だよ。準備期間は余裕があったほうが良いかなって思ってたから、思い出してね」

その他短編

キンイロリヨティは自分の旅程を振り返る

私のレース人生は名前通り、金色だったのだろうか？

デビューは冬の阪神レース場。ジュニアクラス最強決定戦の行われる前の週だった。そこでは3着、初レースにしては上々だったと思うけど、この後のレース人生を暗示しているような感じもする。

初めて勝ったのは既にクラシック初戦が終わった後の東京レース場の未勝利戦。6戦目の事だった。あの時の感覚は忘れられない。あの感覚を何度も味わいたくて私は走り続けたのだろう。

そして私の代名詞となった9戦目、3勝目を挙げた阿寒湖特別。勝った時はただの勝利、その後は苦難の始まり、今は……私のある意味原点かな。

初めての重賞、初めてのG1はクラシック戦線の間に来て来た。……まあ、初G1の菊花賞はおこぼれではあったけど。フクちゃんもスズカちゃんも強かったなあ。

そこから私は勝ちきれなかった。沢山重賞に出たけど、いつも2着、3着。悔しい

レースばかりだったけど、自信は少しずつ出来ていたし、不思議な人気が出てきたのも分かっていった。

勝ちきれない私を応援するファンがどんどん増えていく不思議。同期も先輩も後輩もスターばかりだったけど、ファンレターの数は上位だったりする。

初めて重賞を勝ったのは38戦目の目黒記念。初勝利から丸3年、最後の勝利からは2年8か月が経っていた。そこまで28連敗、決して褒められた数字ではないけど、G1の無い土曜日開催で生憎の悪天候の中沢山のファンが、仲間たちが祝福してくれた事が、とつても嬉しかった。

その翌年、私は何故か中東はドバイにいた。『ドバイウマ娘ミーティング』と言われる国際レースデーに招待されたからだ。春先に行われる様々な条件下のレースを世界中のウマ娘を呼んで行われるこのイベントに何故か私は呼ばれたのだった。現地の評価は最低ランク。それもそうだ。同期や後輩の活躍で日本のウマ娘の評価が上がって来たからとはいえ、私は所詮G1未勝利の重賞2勝ウマ娘。けど、私にもプライドがある。日本の看板を背負っているプライドが。

……乾坤一擲の激走で私は海外重賞を制した。我ながらよく走ったな、よく勝てたなと思う。けど、結局私は国内のG1を勝つことは出来なかった。

振り返ってみても、やっぱり私のレース人生は金色なんかじゃない。

私は沢山の素晴らしいウマ娘と一緒に走った。先輩だとエアグルーヴにメジロドーベル、同期だとマチカネフクキタルやサイレンススズカ、後輩だと挙げきれない。私が走ってきた時代は間違いなく日本のトウインクルシリーズの黄金時代だった。

フクちゃんの渾身の追い込みも、スズカちゃんの異次元の逃げも、エルちゃんの世界に挑んだ走りも、グラちゃんの復活からの激走も、スペちゃんの日本の代表としての走りも、オペちゃんの1年を彩り続けた走りも、ドトウちゃんの乾坤一擲の走りも、デジタルちゃんの外野の声を一掃した走りも全部私は同じターフの上で見えて来た。

私が走ってきた時代。それはきつと金色に輝いている。

ドバイで私の名前を英語表記にされた『Stacy Gold』。直訳すると『輝き続ける』。私の旅程が金色に輝き続けるか、その評価は今の私ではなく何年後かの私やファンの皆さんがする事だ。今の私は区切りの50戦目、年末の香港で行われる『香港国際競争』の一つで最長の香港ヴァーズに集中して、初G1を海外で飾らせていただきましよう！

もしもスピカに新メンバーが入るとしたら……

ある日のスピカのチームルーム。メンバー全員がトレーナーの呼び出しで待機している。

「一体なんなんだろうな〜」

いつも手に持っているルービックキューブを揃えながらゴールドシッパが話題を出した。

「そうっすね〜、普段ならすぐ練習場集合っすし」

「普段は定期ミーティング位ですものね」

「そのミーティングも練習コースのスタンドで適当だもんね〜」

ウオツカ、メジロマツクイーン、トウカイテイオーがそれぞれ思った事を口にした。スペシャルウィークとサイレンスズカが苦笑いしている辺り、トレーナーのいい加減さは皆の共通認識なんだろう。

「そんな事はどうでも良いのよ！ 今日大切な用事があったのに！」

「どうしたんだよ、スカーレット？ ミーティングや練習より大事な用事があったのか

よ」

「そうよ！ せっかく……」

スカレットの話の話を遮るようにチームルームのドアが開かれてトレーナーが入ってきた。

「お、全員揃ってるな」

「トレーナー！ とつと今日集めた要件を話さない！ 私には用事があるの！」

「あら〜スカレットトちゃん、トレーナーさんにそんな事言っちゃ駄目よ〜」

「お姉ちゃん!? (メジャー姉!?)」

トレーナーの後ろからスカレットに声をかけたのはスカレットと同じ髪色のショートカットの美女。髪型とやや高い身長、少したれ目な事を除けばスカレットそっくりである。

「えーと、今日からチームスピカにお世話になる事になりました、ダイワメジャーと言います。妹のスカレット共々、よろしくお願いします」

「メジャーにはウチの手薄なマイル路線を担当してもらおうと思ってる」

どちらかというと中距離以上で活躍するウマ娘ばかり集まったスピカ、リギルとのチーム争いをするなら他路線の強化は必須事項だといえる。

「お姉ちゃん、病気の方は？」

「お医者様からもOKが出たから大丈夫よ。当分はマイル前後を走っていくと思うわ」
「スカーレットさん、病気って？」

事情を知っているスカーレットとウオツカを除いたメンバーを代表してスペがそう尋ねた。

「臯月賞を勝った頃に呼吸器系の病気が見つかったね。ダービー後に入院して治療してたのよ」

「呼吸器系って大問題じゃん!？」

「容赦なく引退勧告までありますわよ!？」

「それでも私は走る事が好きだし、スカーレットちゃんやウオツカちゃんが頑張っている姿を見て一緒に走りたいって気持ちが大きくなったの。スピカに入りたいなって思ったのはスズカさんのお陰です」

「私?！」

突然、話題に上がって少し驚きながら首をかしげるスズカ。

「はい。レース中に走れなくなるほどの故障をしたのに、復帰を目指して努力していた事をスカーレットちゃんやウオツカちゃんから聞いていました。それで私も病気に負けてられないって頑張りました」

「私は誰かの力になれていたのね……」

実際、怪我からの復帰までの間、スズカの元には怪我をした人や病気の人の「私も頑張りますから、スズカさんも頑張ってください」というファンレターがたくさん来ていたのだが、面と向かって直接言われる事で実感が持てた。

「んじゃ、メジャーの歓迎会に行くか！」

「トレーナーのおごりだな」

飛ぶ鳥を落とす勢いのスピカ。きっと彼女達が中心となってトゥインクルシリーズも盛り上がっていくだろう。

この後、トレーナーの財布は真冬を迎えた。

最強VS最強　　〈歌劇王未だ覚醒せず〉

『今年もやってまいりました、冬の祭典、有馬記念！ クラシック世代が世代の壁を打ち破るのか？ シニアクラスの強豪たちが立ちはだかるのか？ しかし、今年はこの二人の直接対決が最大の注目でしょう！ 一人はスペシャルウィーク！ 秋初戦こそ惨敗しましたが、そこから天皇賞・秋、ジャパンカップとG1を2連勝。まだ、誰も達成していない秋3冠を狙う、名実ともに日本レース界の主役の一人です！ もう一人はグラスワンダー！ 今年は春の安田記念こそ落としましたが、それ以外の3戦は勝利と抜群の安定感を誇り、前人未到のグランプリ3連覇を目指します！ 今年最後のセンターステージは誰なのか？ まもなく、レースのスタートです！』

「スペちゃん」

「グラスちゃん、今日は負けません！」

レース場に入場前、スペシャルウィークとグラスワンダーは二人で話していた。

「あのプロワイエを倒したスペちゃんに私が挑む方だと思うのだけれども……」

「それと今日のレースは別問題です！ 私は宝塚で負けてますし、去年の有馬にも勝っているグラスちゃんに勝ちたいと思うのは当たり前です！」

スぺからすると、ふがいないレース（とはいふ物の3着以下とはかなりの差を付けての2着であり、結果だけなら京都大賞典の方が悪い）を見せた自分への反省と同じレースに出る最強のクラスメイトへの敬意から出た言葉だった。

「私も、今年一年シニアクラスの王道路線を走り続けて一番多くG1を勝ったスぺちゃんに勝ちたい」

グラスも、脚の不安から間隔をあけての出場だった自分とは違い、シニアの王道路線を走り続け、文字通り日本を代表するウマ娘となったスぺへのリスpektがある。直接対決で勝つていようともそれは変わらない。

「そうはさせないよ。最強は僕だからね。華麗に二人に引導を渡して見せるさー！」

二人の間に突然入って来たのは今年の皐月賞ウマ娘、ティエムオペラオー。いきなりの割り込みとナルシストな発言に苦笑いなスぺ。一方のグラスは……

「オ〜ペ〜ラ〜オ〜？」

なんか黒いオーラを纏っていた。クラスメイトでチームメイトのエルコンドルパサーをたしなめる時に近いが、後輩の分エルの時より圧力が強めになっている。

「ひいっ!？」

「はあ……自信があるのは良いと思うし、それに見合う実力もあるけど、その自信過剰な部分で足をすくわれたのよ？」

生徒会長のシンボリドルドルフが「3冠を獲れる可能性がある才能」だと太鼓判を押していたオペラオー。しかし、彼女は皐月賞しか獲れなかった。ライバルの激走もあつたが、彼女の慢心も理由の一つだとグラスは考えている。

「お、王者は慢心してこそです！」

「それは今日、私やスペちゃんを倒してから言いなさい」

「……はい」

恐らく、オペラオーがどれだけ実績を上げても変わらないであろう力関係がそこにはあつた。

「それに、そろそろ貴女の入場じゃない？」

「行つてきます……。でも、お二人にも負けませんから！」

そう言い残して入場していく。G1の入場は人気順で上位人気のスペとグラスはもう少し後だ。

「グラスちゃん、『倒してから』って言う位、オペラオーちゃんの能力を買ってるんだね」「……本人には言わないでね。また調子に乗りすぎるから。トレーナーさんにもそう言われてるの」

グラスの言葉に頷いて答えるスペ。慢心があるというのはレースに集中しきれていないという事。スペ自身、それで大きいレースを落としているので、周りがそれを何とかしようとしているのは理解できた。

「それと、スペちゃんは来年ドリームクラスに上がるの？」

ドリームクラスというのはG1を複数勝ち、人気、実力ともにトップレベルのウマ娘だけが所属できる日本ウマ娘界のピラミッドの頂点である。すでにエルは昇格を表明しているのだが、その資格のある同世代馬のスペとグラスは動向を発表していない。

「うーん、実はプロワイエさんからヨーロッパ留学しないか？　ってお話をいただいたから、迷ってるの」

「スペちゃん凄いいー！」

「でも、そうなると会長やエルちゃんを始めとした日本の凄い人たちと戦えないんですよね」

ドリームクラスは一部の国際招待レース以外、各国原則として国内所属のウマ娘のみの出走になるので、留学生はジュニアクラスかシニアクラスに居ないといけないのだが、ドリームクラスへの昇格は年末のみなので、スペが留学すると日本のドリームクラス所属が翌年に持ち越しになる。

「それは難しいわね。私にも生まれたアメリカから留学のお話があるけど、同じ理由で

私も迷ってるもの」

「ブロワイエさんと戦って世界と戦ってみたいと思っただし、日本で学園の皆と戦いたいなど思うんです。……時間は無いけど、納得できる答えを出すよ」

「私もそうね。まあ、今は今年最後のレースだけを考えましょう」

レースが始まった。

今年の有馬記念はスズカやセイウンスカイのようなはつきりとしたレースを引つ張るウマ娘が居なく、普段は好位追走の一人が押し出されて先頭になる展開だった。オペラオーは中団、グラスは後方3、4番手、スぺは最後方からのレースになった。

『今、1000メートルを通過！　なんと、1000メートルの通過が1分5秒！　超スローペースで流れています！』

1000メートルの通過は1分が目安とされている。例えばスズカが普段刻む1000メートル57〜58秒は超ハイペースと言ってよく、今回の65秒というのは実況通りの超スローペースと言っても良い。そして、レースはハイペースほど後続が有利でスローペースなほど先行勢が有利である。つまり、レースの展開は後方にいるグラス、スぺにはかなり不利なのだ。しかも、ここ中山レース場は最高速を出せる直線が310メートルと同じ関東の東京レース場の6割ほどしかないので、厳しい要素が沢山あ

る。

『向こう正面を駆け抜けて、間もなく第三コーナーに差し掛かります。ここで、後続の各選手仕掛けていく！ グラスワンダー、スペシャルウィーク、両選手も動き出した！ ここで先頭変わって、今年の皐月賞ウマ娘のテイエムオペラオー！ オペラオー先頭で最後の直線に入る！』

大きく有利不利の無い中団でレースを進めたオペラオーは第四コーナーの辺りで先頭に立ち、そのまま押し切るつもりでラストスパートをかける。他の娘達もスローで流れたためスパートの余力があった。

『しかし！ しかし、後方から最強の二人！ スペシャルウィークとグラスワンダーが伸びて来た！ 先頭変わった！ スペシャルウィークとグラスワンダーの二人の競り合い！』

が、そんな事は二人には関係が無かった。他の選手に力の差を見せつけるように二人だけのデッドヒート。その勝負に観客から惜しめない声援がかけられる。

『どちらも譲らない！ 意地と意地！ プライドとプライドがぶつかり合う！ スペシャルウィーク！ グラスワンダー！ スペシャルウィーク！ グラスワンダー！ どっちだー！』

実況も、観客も、テレビで観戦していたファンも、判断する係員も、走っていた本人

達でさえもどっちが勝ったか分からない。判定は写真に委ねられることになった。

他のウマ娘が控室に戻っていく中、1位を争う二人は結果の出る電光掲示板を目を離さず見ている。

どちらも、自分が勝つたと信じている。けど、結果が出る瞬間までは確信が持てない。何よりもお互いの実力をよく知るから。

長いような短いような時間が経つた後、写真判定の結果が出た。一着に表示されたのは7。グラスワンダーの勝利だった。

涙を流すグラスワンダーとちよつと人前で見せられないような顔のスペシャルウィーク。数センチの差がこの表情の差を生み出したのだ。

スペは開きつばなした口を閉じて、人前で見せられる顔に戻ってから、
「おめでとう、グラスちゃん！」

と声をかけた。ふがないレースで負けた夏とは違う。全力で戦って負けた。だから、素直に称える事が出来る。

「ありがとう、スペちゃん……」

グラスの涙には秋初戦を終えてから、また起こった脚の問題。その不安と戦い続けて、何とかこぎつけた有馬記念。戦うのは世界最強すら倒した最強のライバルにして、名実ともに『日本一のウマ娘』と言つても良いスペシャルウィーク。苦しみを超えて勝

ち取れた栄冠。だから、感情があふれ出したのだ。

泣いているグラスワンダーを抱きしめるスペシャルウィーク。それが最強の二人が引つ張ったこの年を締めるレースに相応しい一枚となった。それはそこに送られる歓声が証明している。

奇石、奇跡の復活までの軌跡

『幻の3冠ウマ娘』

私のキャッチフレーズとなってしまった言葉だ。デビューから脚の故障による長期離脱までの4戦で見せた私のポテンシャルを評価して付けられたものなんだけど、私はこの言葉が大嫌いだった。

それはまるで私と違って怪我もなくクラシック戦線を戦い抜けた同期の皆を見ていないみたいだったから。

そして、その言葉はシニアクラスに上がった後も私に、同期の皆に付きまといてきた。誰かが活躍しても『幻の3冠ウマ娘』と言われるフジキセキと同世代の〇〇』と言われ、まるで皆が私の添え物みたいな扱いになっていた。

それが焦りとなったのか、リハビリの経過も芳しくなく、復帰までどれだけかかるかずっと分からなかった。どちらかというと人に頼られるタイプの私は、自分の問題を抱え込んでいたあの頃は精神的にずっと不安定だったと思う。

そんなある時、リハビリ中の私に会いに来てくれた娘がいた。

「キセキちゃん！」

普通に生活できるようになったとはいえ競技に復帰できていない私に飛びついてきたのはマヤノトップガン。小学生にも間違われそうな位小柄（私とは20センチ以上離れている）な彼女はこう見えて私の同期で菊花賞ウマ娘。しかも、あのナリタブライアン先輩に勝ったこともあるほどの同世代随一の実力者だ。

「トップガン、もう少し加減してくれないか？」

「ごめん」

謝る気があるのか分からないのか分からない謝罪までが私達のテンプレ。なんだかんだ、私は彼女に甘いのだ。実力はあるのに、性格が原因で成績にムラがあつてどうも評価が低い。

「キセキちゃん、復帰にどれくらいかかりそう？」

普段は他愛のない話ばかりするトップガンが、私にとつても彼女にとつても重要な事を切り出したのが意外だった。

「……分からない。少なくとも春シーズンは無理だと思う」

この時、誤魔化そうと思えば誤魔化せたと思う。けど、良くも悪くも真つすぐなトツ

プガンをはぐらかすのは少しだけ罪悪感があった。

「そっか。一緒に走れるといいね」

トップガンはデビューが遅く（私の怪我前に取ったジュニアクラスのG1、朝日杯フューチュリティステークスよりも後のデビュー）、重賞戦線への参加が秋の菊花賞前だったから直接戦った事は無い。

「そうだね」

「今でも覚えてるよ、キセキちゃんの朝日杯。あの時はデビューしてなかったけど、同期であんなに強くてカッコいい人がいるなんてって思って、一緒に走りたいって思ったもん」

「はは、ありがとう」

「ジェニユちゃんにヤスちゃんと話す時も何時もキセキちゃんと一緒に走りたいねって話になるんだよ」

『ジェニユとヤス』 ジェニユインとタヤスツヨシは同期の皐月賞ウマ娘とダービーウマ娘。私達は所謂幼馴染である。現状はライブル……と言っているのだろうか？

「それ、本当？」

「？ そうだよ？ 二人とも、『勝ち逃げされたままはやだ！』って言ってるけど、あれは照れ隠しだね！」

まあ、確かにあの二人は素直じゃない所があるから、分からなくはない。

「そつか。……トツプガン」

「何？」

「私のキャッチフレーズ、どう思う？」

「『幻の3冠ウマ娘』って奴？ カッコいいよね！」

「でも、それは本当に勝ったトツプガン達をバカにしてない？」

「うーん、その辺は皆気にしてないと思うよ？ 実際、春の二つは当然獲ってたっていう

のは同期の皆の共通認識だし、菊花賞もぼつと出の私が獲ったんだからそう思われても仕方ないかな。悔しい思いも当然あるけど、皆キセキちゃんの事好きだからね」

そういう物なのだろうか？ ……まあ、リハビリの間同期の皆がお見舞いに来てくれたり、手伝ってくれたりしていたから、嫌われては無いんだろうとは思っていたけど。

でも、トツプガンから皆の気持ちを聞いて良かったと思う。私が抱えていたものは私が勝手に感じていた重荷だったから。

「ありがとうね、トツプガン」

「？ お見舞いは私がしたいからしてるんだよ？」

「……まあ、それで良いか。ちゃんと治して、前より速くなるようにトレーニングして戻るよ。絶対」

目標は来年の日経新春杯。シニア王道路線の強豪達と戦うために、一年走りきるために、怪我をしないために時間をかけて体を作っていこう。

『今日のメインレースの目玉はなんと言ってもこの人！ 3冠ウマ娘确实と言われながらも怪我に泣き約二年のブランクを経ての復帰戦となったフジキセキ！ 『幻の3冠ウマ娘』と言われたその実力は健在か？ 注目のスタートは間もなくです！』

「さあ、私の魅せる夢の世界に皆様をお連れしようか！」

お試し投稿 日曜日は騒がしく

ウマ娘

それは異世界から受け継いだ輝かしい名前と競争能力をもつ存在。彼女たちのレースの結果は、運命はまだ誰も知らない。

アメリカ合衆国はケンタッキー州。世界最大のウマ娘生誕地である同地には世界中のウマ娘のトレーナーが次の原石を探しにやって来る。そんな場所の広大なトレーニング施設の片隅で一人ぼっちのウマ娘がいた。白色が混ざってしまっている長い黒髪に同年代のウマ娘に比べて小柄で痩せ型の体、チャームポイントのはずの長い脚も外側に見れば分かるほど反ってしまったっている所謂X脚という、見た目にも競争能力的にも欠点だらけの体に、幼い頃に合った大病と一時期動けなくなるほどの大事故にあう不運もあり、避けられていた。

「州立の学校には学科は通ったけど面接で落とされたし、スカウトも無いし……デビューできれば良い線行くと思うんだけどなあ」

トレーニング後のケアをしながら彼女は自分にそう言い聞かせる。実際、こちら辺のウマ娘達との模擬レースでは負けた事は無い。それでも何も音沙汰の無いのは見た目が理由なのだろう。

普通ならあきらめていたのかもしれないが、彼女自身の強い意志と、彼女を認めた最高の親友が居たから、今もあきらめずにいられるのだ。

「エス、お客さんだよ」

そう言つて、現れた麦わら帽子にチェックのシャツとデニム生地のおーバーオールといかにも農夫といった格好をした老年の男性。こちら辺一帯の顔役であり、ウマ娘達からは「じっちゃん」と呼ばれ、慕われている。

「ワタシにお客？ スカウトか、じっちゃん！」

飛び起きる「エス」と呼ばれた少女。

「まずは、話を聞いてみなさい。お客さんは休憩所に居るよ」

「分かった！ あんがとな、じっちゃん」

目的地に向かって一直線に走り出す、エス。

「ウィークポイントを持ちながらもあれだけの走り……あの子も運が無いなあ」

エスの後姿を見ながら、彼が呟いた言葉はテキサスの風に消えていった。

エスが向かったところに居たのはスーツ姿の男性。しかも、ここ数年でこの辺りでも見るようになったアジア系の顔立ちだった。

「おじさん、日本人？ あっ、ワタシ日本語分かるよ。敬語？ は良く分からないけど」
向かい合って座り、話始める二人。

ウマ娘の国際交流が活発になって来た昨今、彼女達の間では他国の言葉を学ぶことがトレンドになっている。発祥の地であるヨーロッパ、最大の市場のアメリカは英語で何とかなるのだが、今最も注目されている日本だやはり日本語の方が良いからだ。

「おじさんって……まあ、良い。日本語が分かるなら日本語で話させてもらおう」
男性は持っていたカバンから書類を取り出し、本題を切り出した。

「日本のトレセン学園に来ないか？」

「それはスカウトって事？」

「ああ。今、我らがトレセン学園では育成機関の時代からの国際交流の一環として留学生のスカウトを活発化させている。という物の、デビュー前の娘のスカウトは初めてなんだが」

「へえ。アメリカの学園に見学に行ったけど、100パーセントアメリカのウマ娘だったよ」

「日本の歴史は浅いからな。海外からの影響を与えて国内のレースレベルを上げるのが

目的だ。ウイニングドライブはお国柄が出るから、そこが問題なんだが」

レースは国によって結構差がある。足場が悪く、自然を生かした深い芝コースが主でスタミナとスピードが求められるヨーロッパ、土のコースがメインでスピードとコーナリングの上手さ、根性が試されるアメリカ、人の手で綺麗に整備された芝と砂の両方が走り、スピードと瞬発力が大切な日本。

ウマ娘達にも得意なレースが当然出てくる。国際交流が行われるようになってから、国内でそこそこでも海外で大活躍出来る娘が現れたりしている。

「ワタシは日本のライブ、好きだよ？ 確かにアメリカやヨーロッパとは違うけど、それぞれにそれぞれの良さがあると思うし。で、日本の留学の話だけど、もちろん受けるよ！」

「即決かよ……良いのか？」

「良いよ。だって、アメリカの学校は全部落ちたし。走れるならどこにでも行くよ」
「全部落ちたって……見た目のせいかな？」

「そ。ちびで貧相、子供の頃のショックとこの辺の娘達に馬鹿にされ続けたストレスで白髪交じりの髪。見た目が低くてレース的にもかなりのX脚っていう爆弾を抱えている子を取ろうと思わないよ」

自虐的にそういったものの、エスの目には火が付いている。

「けどさ、ワタシは誰にも負けないように練習してきたつもりだし、近い年代の子には負けた事は無い。歌だつてダンスだつてちゃんと勉強してる。それを発揮できるなら世界のどこにだつて行ってやる！」

「OKだ。俺は日野静也。お前のトレーナーになる」

「ワタシはサンデーサイレンス！ 皆からエスつて呼ばれてるよ！ よろしくね、トレーナー！」

これは小さな少女が大きな夢をかなえるために走り続ける物語。とはいうもの……

「日本かく。美味しい物多いんだよね？ 色々食べたいな。お菓子とか」

「美味しい店なら紹介するぞ。お菓子は……同級生や先輩に聞けばいいんじゃないか？」

今はまだ一步目を踏み出してすらいない。彼女の運命は……異世界の私達でも分からない。

Tony's kitchen

日本で唯一の国立のウマ娘養成施設、通称『トレセン学園』。地方にいくつかある養成施設よりもあらゆる面で良い環境である。しかし、どれだけ素晴らしい施設でも補えない物がある。その一つが……

「故郷の味、恋しい……」

大盛りのご飯を食べながらそう呟くのは現役屈指のスターウマ娘である『葦毛の怪物』オグリキャップ。

何も知らない人から見たら、凄い食べているように見えるのだが、胃袋までもが怪物な彼女からしたら、ビックリするくらいいつもより少ない量しかない。

理由は端的に言えばホームシックである。

この学園にいるウマ娘達のほとんどは地方出身であるのだが、トレセン学園に入ってくるような娘達は幼年期教育の段階で同じ学校やトレーニング施設を使っている場合が多く、友人、知人がそれなりにいるから、ホームシックになる生徒は殆どいない。

しかし、オグリキャップはそういった過程を通らず直接地方自治体が開催しているウ

マ娘レース（ローカルトウインクルシリーズやご当地トウインクルシリーズなどと呼ばれているもので、URAの管轄しているトウインクルシリーズより参加条件などが緩い）に参加して、そこで実力が認められてトレセン学園に入学したという珍しい経緯を持つている。なので、周りに知り合いがないから、他の娘に比べるとホームシックになりやすい。

まあ、彼女の場合図太い方なので寂しさよりも独り言の通り地元の味を食べたいという思いが大きいのだが。

「どうしたの、オグリ？」

食堂の入口の方から何故か軍手を付けて七輪を持っている女の子が話しかけた。

「……トニービンさん、地元味が食べたいです」

オグリに話しかけた茶髪の少女はトニービン。イタリア生まれでヨーロッパ最高のレースである凱旋門賞にも勝った超一流のウマ娘なのだが、凱旋門を制した翌シーズンから日本に移籍してきた。この謎の移籍に向こうのメディアでは移籍の理由について様々な憶測が流れている。

「オグリって出身何処？」

「岐阜の笠松。中京レース場が一番近い」

「ふむふむ、よし、このトニーさんに任せなさい！」

そう言つてトニービンは、どこからか取り出したバンドナとエプロンを装備して食堂の厨房に向かう。気になったオグリは後ろに着いていく。

さて、厨房は基本的に自由に使う事が出来る。生徒は使つた食材を報告しておけば無償で使う事が出来るので何人かの生徒はここで自作の弁当を作っているし、休日にお菓子作りを仲間内でするといふ姿も見られる。その一角に通称『トニービンゾーン』がある。これはイタリア時代にグルメ本やレシピ本を出版するレベルの美食家で料理人の彼女が地元から持ち込んだ調理器具や様々な調味料、香辛料が置かれ、その品揃えは本職の料理人が足りない物を借りに来るレベルである。

そう、ヨーロッパトップレベルの彼女が日本への移籍を決めた最大の理由は「美味しい物があるから」だった。なので、本来ならレースやらその応援がある休日は日本中を飛び回つて様々な料理を食べ歩いてる。

「少し前にオグリの地元の方に行く機会があつてね。その時に食べたのが美味しかったから作ろうと思つてね」

そう言いながらトニービンは温めなおしたご飯を荒めに潰し始める。

「……五平餅！」

「あ、分かるんだ。外で炭火を作つてて丁度タイミング良くオグリが故郷の味を食べた
いつて言うから、誘つたんだ。手伝つてくれる？」

「ああ！」

トニービンの潰したご飯をオグリが割っていない割り箸に小判型に貼り付けていく。
トニービンが下準備を済ませると、外で炭火を作っていた円形の七輪から、お店で焼き
鳥なんかを焼くのに使われるのをよく見る長方形の七輪に炭火を移して、形にした五平
餅を素焼きしていく。

「……たれは？」

「冷蔵庫に作つたのをに入れてあるよ。出してきてくれる？」

オグリは頷いて、冷蔵庫に向かった。戻つてくると、たれを入れた容器と透明なプラ
スチック製のタンブラーを持っていた。

「これは？」

「ああ、私特製のミックスマックスだよ。ニンジンって寒い時期が旬なんだけど、雪が降
る所なんかは一冬雪の中で寝かせるんだって。そうするとそこら辺のニンジンとは一
味違ったものになるのよ。そのニンジンをベースに色々入れて作つたのがそれ」

「……飲んでいい？」

「どうぞ」

蓋を開けて一口含んだ瞬間、大きく目を見開く。そこからは吸引力の変わらないオグリの本領發揮で一息に飲み干した。

「美味しい、もう一杯！」

「残念ながらメインのニンジンが残ってないんだ。明日お店から送ってもらおうけど、増やせないか聞いてみるよ」

「お金、一杯払います」

「いやいや、適正価格で渡すから」

そう言いながら、トニービンは素焼きの餅に自家製たれを塗っていく。辺りには焦げた醤油味噌系のいい匂いが漂っていく。

「……この匂い、良い」

「この香りは日本独特だと思うよ。食欲を刺激するズルい香りだね。……あ」

「どうした？」

「いや、この香りを換気扇で外に出してたら、人が来そうだなうって」

「……それまでに食べきれないと」

「しっかりと噛んで食べてね。……さてと」

腕まくりをしたトニービンは再び作業を始める。廊下の方を向いている彼女の耳にはここに向かってきているいくつもの足音が聞こえていた。

「さて、少し腕を振るいますかね」

メジロくその血の運命く

ウマ娘達の目標は何処なのだろうか。

ウィンタードリームトロフィーに代表されるドリムシリーズに参加する事？ あ
るいはダービーを勝つ事？ それは彼女たちがそれぞれ定めるものである。

ただし、ある一門に属する彼女たちには定められた目標が存在する。その一門の名は
『メジロ』。彼女たちの目標とは日本最長G1・天皇賞（春）。

今年、その名前を背負い偉業に挑戦する少女が居る。彼女の名前はメジロマツクイ
ン。彼女には一門の名の他に背負っている物がある。

彼女の育ての親ともいえる、育成年代の師、メジロテイターン、さらにテイターンの
師であるメジロアサマ。メジロの名を背負い日本最長のG1を制した葦毛のヒロイン
達である。

名の運命、選手としての血脈の運命を背負い彼女は大舞台に挑む。

（大丈夫ですわ。この日の為に去年の秋から準備をしてきたんですもの。ダービーよ

り、ジャパンカップより、有馬記念より大切な子の舞台の向けて。名の為、先生の為、そして何より共に歩む仲間の為に、今日はかならず勝ちますわ！)

マックイーンの事情を理解しているトレーナーはクラシック最終戦の菊花賞後、マックイーンとの話し合いにより翌年の天皇賞(春)に照準を定め、半年準備に費やす事を決めた。

そして、この半年の間マックイーンは既に天皇賞を勝っているスペシャルウィークをパートナーにスタミナの強化とレースのイメージを作ってきた。

京都レース場に詰めかけたファンの目線はマックイーンに注がれる。歴史と伝統の春の盾を賭けたレースの主演は譲れないのだ。

ゲートが開かれる。京都の外回り3200メートルはスタートすぐに三コーナの上り坂がある。長丁場である事も相まって明確な逃げ戦術を打つ選手が居なければ序盤はペースが上がりにくい。今回も平年通りのペースでレースは進む。

マックイーンは中団の前目、外側でレースを進める。

(逃げの選手にも後ろの選手にもプレッシャーを掛けられる位置こそ私にとってのベストの位置ですわ)

マックイーンの理想のレースはチームメイトのスペシャルウィークの天皇賞(春)で

ある。逃げる有力馬娘のセイウンスカイのすぐ後ろに位置してプレッシャーを掛けながらレースを進め、後ろからくるメジロブライトと同等の末脚で追撃を凌ぐという、卓越したスタミナと瞬発力が両立しているスペシャルウィークならではの戦法で勝つたのだ。

もちろん、マックイーンにスベの戦法をそのまま使う事は出来ない。しかし、見習うべき所はたくさんあった。

京都レース場は1と2コーナーがかなり急なカーブとなっている。なのでここで行われる中長距離のレースはコーナー過ぎからの向こう正面でペースがやや落ちる。これはコースの形状的に仕方のない事なのだが、そこにも駆け引きがある。

マックイーンは自分より前にいる選手に少しペースを上げるように見せてプレッシャーを掛ける。G1に出てくるような選手だから、それに反応してしまい、なし崩し的に動いてしまう。それが連鎖して先頭を走る選手のペースまで狂う。

(ここに息を入れさせない。向こう正面から坂を超えるまでにどこまで消耗させられるかが鍵ですわ)

マックイーン最大の武器であるスタミナを活かすためにはとにかく消耗戦に持ち込ませるしかない。長距離戦の実績なら出場選手の中でもナンバー1なのだが、より自分

の土俵に持ち込む事に決めた所に彼女のこのレースに賭ける並々ならぬ思いがある。
(仕込みは上々、後は仕上げるだけですわ)

マックイーンはセオリ―通り坂を下つてから仕掛けた。

(坂で仕掛けれるのは天才か頭のネジが外れたバカですわね)

坂を下つてすぐでもかなり早い位置でのスタートになる。が、彼女が勝つために作つた作戦なのだ。彼女のプライドを賭けた選択だ。

『さあ、第4コーナーを回つて先頭はメジロマックイーンに変わったー!』

最後の直線、場合によっては数秒で展開が二転三転する見ている側からすると非常に面白いのだが、走っている側からするとしんどい。たったの数百メートルなのに今まで走ってきたよりも消耗すると言っている子までいるくらいだ。

しかも、今回はマックイーンの作り上げたとおきの舞しやうもっせん台だ。彼女はそこを先頭で駆けていく。

『後ろからの追撃を振り切つて今、ゴール! 今年の春の天皇賞はメジロマックイーンが勝ちました! 名門「メジロ」に、師匠に捧げる春の盾!』

春の天皇賞は春のシニアクラスのG1では一番権威のあるG1である。そして、そこを勝つた彼女は自らの実力でトゥインクルシリーズの主演に名乗りを上げたのだ。

「主役の座は譲りませんわ！」

神はいる。そう思った

秋の天皇賞6着、ジャパンカップ1着。これが私のこの秋の成績だった。

クラシック級になってすぐに笠松から中央に移籍してもうすぐで3年。走ったレースは19戦、勝ったレースは11。実績も認められて来年にはドリームシリーズに参戦する事になる。トウインクルシリーズでの出走はこの有馬記念が最後になる。

どうも、秋になってから調子が上がらない。体調はそんなに悪くはないと思うのだが、食事はあまり喉に通らないし、レースへの気合、モチベーションも上がらない。……疲れているのだろうか？

私が中央に来た時、同じ葦毛で当時最強と言われていたウマ娘が居た。彼女の名前はタマモクロス。中央に来た私に気を掛けてくれた友人で、最大の壁だった。

そこからスーパークリーク、イナリワン、バンブーメモリー……沢山のライバルがいた。皆とのレースは本当に楽しかった。

今はどうだろうか？

タマは私が移籍した年にドリームシリーズに昇格した。実績抜群かつ1レースでの負担の大きいタイプの彼女はレース間隔の空くドリームシリーズの方が向いていると

思ったから素直に祝えた。

クリークもイナリもケガの休養と共に昇格を発表した。メモリーはもう1年トウインクルシリーズを走るらしいが今年に短距離専念を決めたので私と当たる事は無い。

暮れの大一番である有馬記念の前日、私はいつも通り夕食を取っていた。秋になつてからずつと取材がしつこくて、ゆつくりできるのは皆が気を利かせてくれる食事時位なものだった。

「オグリ、ここええか？」

食事位は静かに食べたい気もするが、気の置ける友人と共に食べるのも悪くない。

「タマか、良いぞ」

「おおきに」

私の前に座つて自分の分を食べるタマ。……小柄だが、あれだけで足りるのかいつも思う。

「……なあ、オグリ」

「うん？」

「最近元気がないやないか。飯の量も減つとるし」

中々聞きにくい事をズバリと聞いてくるな。

「周りがうるさくてな」

「ほおー。まあ、それもええ事ちゃう？」

一体、調子も出ずに気力まで出ない今の状況の何処に良い事があるんだ？

「だって、オグリは良くも悪くも飯と走る事しか頭にないやろ」

それは否定できない。

「笠松から来た時もマイペースを貫けたから、環境に適應できたんやと思うけど、自分だけの力やと限界はやっぱあると思う。でも、今は周りの声も聞こえてる悪い事だけじゃなくて応援する声も聞こえるはずや」

「……そうだな」

学園から寮への帰り道で行きつけの食べ物屋さんで私に「頑張ってください」と声をかけてくれる人。

小さな子供も居た。私くらいの人も居た。サラリーマンも居た。主婦の人も居た。お年寄りも居た。老若男女問わずだった。

「今回の有馬の人気投票は過去最多の票でお前が一位や。それだけやない。今年のダービーの19万人越えのレコードの客入りもお前から生まれた熱や。これは会長だろうが誰だろうが出来んかった事や」

ライバルのタマにそう言われると嬉しいけど恥ずかしい。

「多分有馬もとんでもない人入りになるやろう。それは他のレースと違ってお前を見に来るんや。稀代のアイドルウマ娘をな。それに」

そこでタマは一回言葉を切った。そして

「天下取るチャンスやで？」

どういふ事か少し考えてみる。……なるほど、URAの年度代表ウマ娘の事か。クラシック級の時に最優秀クラシック級ウマ娘は頂いたが、年度代表ウマ娘は貰っていない。というかその時の年度代表ウマ娘はタマだった。

今年はG1を複数勝したウマ娘は居ない。ならば、天皇賞かダービーか有馬記念が勝ったウマ娘が受賞するだろう。ならば狙ってみるか。

「そうだな」

「おつ、オグリにもそういう欲があったんやな」

「いや、今出た。……ありがとう、タマ」

「礼は有馬の勝ちでな」

「ご飯もおごる。笠松でな」

「マジか！ 笠松で食ったきしめん美味かったからもう一回食いたいと思ってたんよ」

『笠松く、笠松でございます
ただいま。』